

ボランティア通信

神奈川中学校

松本中学校

六角橋中学校

戸塚中学校

戸塚高校定時制

老松中学校

栗田谷中学校

港中学校

白幡小学校

大口台小学校

二谷小学校

神橋小学校

青少年の居場所

のびのび楽習塾

2013年7月19日

発行日:2013年 7月1日

ボランティア通信

～神奈川中学校&青少年の居場所～

【神奈川中学校】

「先生になってもらいたくない」

英語英文学科 3年 西島 将

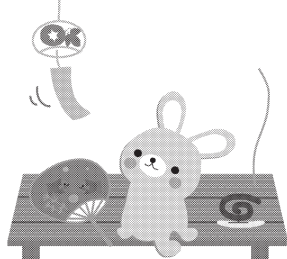
〇目次〇

【神奈川中学校】

先生になってもらいたくない 西島 将	1
貴重な学びの場 嶋 由加里	2
現場で学べること 萩原 慎	2
生徒との関わりを通じた指導 柏 浩太	3
1人1人と向き合う個別支援級 郷 純之助	3
先生の力は愛 八巻 薫佳	4
ボランティアで築いた関係 菅野 雅	5

【青少年の居場所】

出来ることを共に 阿部 由希	5
ボランティア演習 渡邊 省吾	6



「西島くんには、先生になってもらいたくない」
先日、僕が教師を目指すキッカケとなった恩師に再会した際、こう言われた。それ以上は何も言うてくれなかったのですが、どのような意図があったのかは僕にはわからない。ただ僕の中で、何かが崩れ落ちたような気がした…。

間もなく、学校ボランティアを初めて2年が経とうとしている。昨年度までは神奈川中学校での土曜塾で活動をさせていただいていた。そして今年度からは、交流級および個別級でATとして活動をさせていただいている。ATとしての活動は初めてだったので、最初は不安でいっぱいであった。しかし、交流級・個別級ともに、先生方のアシストもあり、それほど苦労はせずに授業に参加できるようになった。

交流級の方では、昨年度土曜塾に来ていた生徒がいるクラスに行くこともあり、土曜塾では見る事ができなかった生徒たちの普段の姿を見ることもできるのでとても新鮮に感じた。交流級でのATでは、毎週同じクラスに行く訳ではなく、その日に英語の授業があるクラス(学年は関係なし)に行くため、少しでも早く名前を覚えてもらおうとネームプレートをつけるようにしている。そのおかげか、最近では「西島先生おはよう!」「今日は先生いるんだ!」など声をかけてくれる生徒も増えてきたので嬉しく思う。個別級でのATでは、少なくとも毎週授業2コマ分は行くようにしている。そのため、交流級以上に名前を覚えてくれた生徒や積極的に話しかけてくれる生徒がたくさんいるので、毎週のボランティアがとても楽しみである。初めの頃はどのように接すればいいかわからない生徒もいたが、最近では生徒一人一人をよく観察することで、生徒にどのように接すればいいのかなどが見いだせてきた。教師にとって生徒を観察することがいかに大切なことを改めて考えさせられたのである。以前、副校長先生とお話をさせていただいた時に「個別級では得られることがたくさんあるので、教師を目指す人には、ぜひ一度個別級で活動してもらいたい」とおっしゃっていたのを思い出した。何となくだが、副校長先生の言葉の意味が理解できてきたように思う。

ATをやるようになってから、学校現場で先生や生徒と関わるので、毎週のボランティアは今まで以上に勉強になっている。正直なところ、恩師にあのようことを言われてから「教師になりたい」という気持ちに揺らぎが生じていた。しかし、ボランティアを行なっているうちに「やっぱり教師になりたい」という感情を強く抱くようになった。今は一切の揺らぎもない。ボランティアを通していろいろなことを学び、それを糧にして将来は立派な教師になりたいと思う。

そして願わくは、いつの日か「西島くんが、先生になってくれてよかった」恩師にそう言ってもらえる時が来れば…。

貴重な学びの場

人間科学科2年 嶋 由加里

私は昨年から神奈川中学校の特別支援級である個別級でATとしてボランティア活動をしており、今学期も継続して活動を行っている。

新学期になりボランティアへ行くと、新1年生が入って教室がさらに賑やかになっていった。初めて会う生徒と打ち解けられるか不安であったが、ホームルームの後に全員が私のところまで自己紹介をしに来てくれたので、その日のうちに1年生の名前を覚え、何人かとは親しく話をする事ができた。また、今学期から時間割が固定ではなくなったので、ボランティアに行く度に異なる時間割になり様々な授業に参加できるようになった。これにより、生徒一人一人の興味があること、得意なことや苦手なことなど、授業を通してより多くの面が見えてきた。各教科の得意不得意はもちろんだが、総合の読書の時間にどんな本を読んでいるのかによって、その生徒が何に関心を向けているのかもわかる。今までは休み時間に生徒が本を持ってきて、好きなものについて話してくれることがあったが、その前に何に興味があるかわかるので話が広がり、普段あまり話さない生徒の好きなものも知ることができた。

昨年ボランティアをはじめた頃は、どの生徒がどれほど理解できているのかわからず、生徒にわかりにくい説明をしてしまったことがあった。すべての生徒に同じ教え方をしても、それで理解できる生徒もいればわからない生徒もいるのだ。今ではだんだん生徒のことがわかってきたので、できるだけそれぞれの生徒に合ったわかりやすい教え方をしようと努力をしているが、この教え方であっているのかという不安がある。しかし、「嶋先生が教えてくれた通りにやったらできた!」という言葉を開けるのが嬉しく、また工夫してがんばろうと思えた。ボランティアへ行ったら先生方に「助かっている」という声を掛けていただいているが、実際自分が本当に役に立っているのかわからない。自分の力不足でできなかったことや、特に何もしないで終わってしまうことがある。今、自分は何をすべきかを考え、もっと視野を広げていきたい。そのために、先生方や一緒に活動している先輩の様子を見て、この貴重な場でいろいろ吸収していこうと思う。今は学校の

ためのボランティアというより自分の学びの場になっているので、はやく本当のボランティア活動ができるよう、がんばっていきたい。

現場で学べること

経済学科2年 萩原 慎

私は現在、神奈川中学校でATとして特別支援級と社会科の授業に参加させてもらっている。今回のレポートでは主に特別支援級においての活動の際に学んだこと、感じたことについて書いていく。

私が今までに通ってきた小学校、中学校には支援級がなかったと思うが、どのようなクラスなのか全く想像がつかなかった。また障害をもつ生徒に対してどのように接していけばいいのかなど不安はたくさんあった。そんな中での初日、支援級には本当に様々な生徒たちがいて、全く障害など抱えているように感じさせず積極的にコミュニケーションをとってくる生徒や、話すことや行動に落ち着きがない生徒など様々だった。

しかし、国語や数学の時間となると平仮名が書けなかったり、小学校程度の計算問題にミスが目立つなど、生徒一人一人の課題が見えてきた。私は1年次のボランティアでは小学生に勉強を教えるということだけしかやってこなかったもので、どのような教え方が良いのか現在でもそれは大きな課題である。

学習面だけでなく、行動に関しても社会でしっかりと生きていくためには必要なことであり、先生方を見させていただくと、学習面よりも普段の日常生活の行動やあいさつに対して重点を置いているようにも見える。生徒ごとに注意の仕方が違い、その生徒があまり人に頼りすぎないように、つまり自分の力でいろんなことができるようになって欲しいという思いが見えていて伝わってくる。

支援級の中にK君という言動に落ち着きのない生徒がいて、先生に対しての言葉づかい、授業中の態度など、まだ1年生ということもあるのだろうが、他の生徒に比べ多くの課題を抱える子がいる。私はその子が授業中に立ってどこかに行こうとするとすぐに駆け寄って座るように諭したりと、その子のためだと思いつつもそのようにしていたのだが、ある日、先生方からK君がまた同じような行動しても、あまりすぐに注意したり駆け寄ったりはしないで欲しいと

言われた。今のままでは人にすぐ頼ってしまうという癖がついてしまうためだ。そして自分は今何をすべきなのかということを本人に考えてもらい少しずつでも変化を起こして欲しいということでもある。その対応はすぐに効果があった。次の週になってみるとあまり席を立たなくなり、周りから席を遠ざけて座るといったこともなくなった。生徒一人一人にあった指導があるということを初めて「現場」で実感することができた。

以上のことから、私は今後は生徒の性格などをより意識して生徒に接していこうと思った。生徒の成長につながるように様々なことを考えたうえで、今後もより充実した活動にしていきたいと感じた。

生徒との関わりを通じた指導

法律学科4年 柏 浩太

私は昨年10月から、神奈川中学校の個別支援級8・9・10組で学校ボランティアとして活動しています。活動の内容は、体育、数学、国語などの各教科で生徒とともに活動をしたり、生徒の授業中の学習の補助をしたりしています。専門教科のATとは異なり、学習の補助だけでなく、授業中や休み時間での生徒の指導などの機会も多く、活動内容は幅広いように感じます。それだけに、生徒と多く関わりを持つことができ、関わり方についても深く考えることができる、ということも個別支援級での活動の特徴だと思います。

活動を始めてから半年以上が経ちましたが、最近の活動では「生徒とどう関わるか」ではなく、「関わりを通じてどのような指導ができるか」ということを意識的に取り組んでいます。私自身4年生ということもあり、今後に控えた教員採用試験やその後教師として教壇に立った時のことを考えると、いつまでもボランティアとしての立場には甘えられず、教師としての立場で生徒と接することが必要だと考えたからです。しかしながら、実際に生徒に対して指導や声掛けを行うということは、やはり簡単ではありません。これまでの活動では生徒の日常の話を聞いたりすることが生徒との関わりで、授業中に大声で話してしまったり、着席せずに教室を

歩き回ったりする生徒に対しては、注意をしたり活動を促したりする先生方の指導の様子を見ていることが多かったように思います。最近はそのような生徒に対して、静かにしなければいけないことや着席して授業を受けなければいけないということを積極的に指導するように心がけています。

実際に生徒に指導や声掛けをするようになって気づいた点があります。それは、生徒の話や主張を聴く、あるいは受け入れる姿勢を作ってから指導を行うことが重要だということです。個別支援級の生徒には、授業中に先生やクラスメイトが話しているにも関わらず、教室を立ち歩き、自分の思いや考えを周囲に発散させてしまう生徒がいます。初めてその生徒に接した時はどうしていいか見当もつかず、ただその様子を見ていることしかできませんでした。しかしあるとき、どうしてこの生徒はこのような行動をするのだろう、という一瞬の思いつきから、その生徒に対して「どうして教室にいるのが嫌なの？」と質問をしたことがありました。するとその生徒は「恥ずかしいから」と答えてくれました。その場では、クラスメイトと同じ教室で活動することの何が恥ずかしいのかがよくわかりませんでした。

が、後々振り返ってみるとその生徒なりに教室にいることの不安や心細さを「恥ずかしい」という言葉で表現してくれたのだと思います。

現在、その生徒に対しては「みんなもやっているよ」とか「まずは少しだけ頑張ってみよう」などのように、できるだけ安心感を与えられるような声掛けを心がけています。私の主観ですが、以前よりも指導の内容が通じやすく、パニックを起こす機会も減ってきたように思います。このような指導が最善の方法であるかどうかはわかりませんが、少なくとも生徒を受け入れる教師の姿勢、というものはそれだけで生徒に安心感や信頼感を与えることのできるものだと私は考えています。

今後も受け入れる姿勢というものを大事にしながら、生徒との活動や会話など色々な場面で関わりを持ち、そこで得た情報を上手く指導に生かしていけるよう取り組んでいきたいと思っています。

1人1人と向き合う個別支援級

人間科学科4年 郷 純之助

私は、今年2月から神奈川中学校の個別支援級でAT（アシスタントティーチャー）としてボランティア活動をしています。実際の教育現場を見ることのできる貴重な機会であり、また、これからの教育実習や採用試験でボランティアでの経験をいかすことができるというアドバイスをいただき、活動することを決めました。

私は、小学生のころ同学年に個別支援級の子がおらず、中学校高校でもいなかったので、発達障がいの子もたちとの出会いは初めて経験することがとても多くあります。

ある子は騒々しい音や急な音が苦手ということで、少し騒がしくなるとよく席から移動してしまうことやパニックになることが多く、普通級との交流のときもあまり馴染めずということがありました。しかし、しばらく接している間にすべての音が苦手というわけではなく、大丈夫なものもそうでもないものがあるということがわかり、しっかり見ることでわかってくることがあるということを学びました。この子に限らずに素直になれなくて周囲ともめてしまう子や周囲と協調することが苦手な子など、子ども1人1人で苦手なこと理解できることに違いがあるということを、毎週行く度に感じています。それと同時に教育の仕方に絶対的なものはないと改めて感じました。

ATの活動を通して、私自身の足りないところや未熟なところを感じることも多々あります。本当の教師ではなく、大学生のボランティアという立場で子どもに注意したりするときに、加減がわからなくてうまく注意することができず、先生方の実際の指導を見て、それを私なりに工夫してみようと思ってみたものの結局うまくいかず、生徒指導の難しさを痛感しています。また、実際に子どもたちに何かを教えようと思ったりするときや説明しようとするときには、本当にわかりやすく言えているのか考えながら説明したり、説明した後でもっとこうすれば良かったかなと思うこともあります。試行錯誤を繰り返しながらも1つ1つの経験をしっかりと自分のものにしていくようにしていき、そして、今後のボランティア活動では少しでも学んだことを活かしていきたいと

思います。

学校現場という普段なかなか見ることのできない教師の仕事を間近で見させていただいていると、百聞は一見に如かずの言葉の意味をととても感じます。私自身が生徒だったころとは違った視点で教師を見ると、常に気を配り子どものことを考えているということがとてもわかりました。私が教師だったら何をしてあげられるかということも考えながら今後も活動していきたいと思います。

先生の力は愛

英語英文学科4年 八巻 薫佳

私が神奈川中学校でボランティアを始めてから、今年度で3年目となった。土曜塾は昨年度を以て終了になってしまったが、ATは続けさせて頂いている。昨年度は三年生を担当させて頂いていたが、今年度は一年生のクラスでの実習を控えているので、一年生と三年生の両方を担当することになった。担当して下さる先生が変わったことで、授業での自分の立ち位置も変わった。一年生でも三年生でも、先生がなるべく私のことも活躍させようとして下さるので、そのおかげで生徒との関わりも以前に比べて増えたように思う。生徒との関わりが増えたのは先生方の計らいのおかげであり、最近になってますます先生方の配慮に感謝するようになった。

そして先日、先生方のお力を再確認する出来事があった。三年生の修学旅行である。私は支援員として修学旅行に同行した。車いすを利用している生徒の補助が主な役目であったが、必要に応じて見回りや引率も行っていた。私は普段から、自分は『先生と生徒の間にいる立場』であると認識してボランティアを行っていたが、このときはどちらかという先生寄りの立場に立っていた。班行動でないときは、基本的に先生方と同じような役目があったからである。

そのこともあり、私は先生方の動きをよく見るようにしていた。そこでわかったのは、先生方の団結力の強さである。担任の先生が中心となって生徒を引率したり見回りをしたりし、そこで穴が空くようであれば他の先生が即座に、かつ自然に、何を言うでもなく当たり前のように補助に入る様子を私は何



度も見た。先生方が助け合い、支え合うことで、生徒も安心して先生方に甘えることができるのだらう。また、このチームワークは修学旅行でのみ発揮されているものではなく、普段の学校生活からこのような助け合いがなされているからこそ修学旅行でも発揮されているのではないかと感じた。

先生方が深夜や早朝に見回りや会議を熱心に行う様子を見て、どうしたらそのようにがんばることができるのだろうか、と考えたこともあったのだが、考えたのは一瞬で、答えはすぐにわかった。会議で先生方が少しでも議論になる場面があったのだが、落ち着いて内容を聞いてみると、どうしたら生徒が安心できるのか、楽しむことができるのか、安全に過ごすことができるのかということをそれぞれの視点から仰っていることがわかり、そのことから生徒に対する先生方の深い愛を感じた。生徒のことを一番に考え、生徒のことを普段からきちんと見ているからこそ、意見がぶつかって議論になることもあるが、深夜や早朝でも熱心に生徒の為にがんばることができるのだとわかった。先生方の原動力は、生徒への愛にあるのではないだろうか。

先生方と共に行動したりお話をしたりする場面が普段の学校生活でも増え、修学旅行でまたさらに増えたため、先生方の想いを感じ取る機会を多く持った。そのことにより「先生ってすごいなあ」と思うと同時に「先生って良いなあ」と、以前よりも強く思うようになった。今回の出来事や、とある先生の「教師は人を見る職業ですから」という言葉にあるように、教師は生徒のことをしっかりと見て、生徒のことを何よりも一番に考えていかなければならないのだと思う。そしてそれは教師という立場でなくても、ボランティアとしても実習生としても同じことだと思うので、これからまた気を引き締めて生徒の為に精一杯頑張っていきたい。

ボランティアで築いた関係

菅野 雅

今年1月から学校ボランティアを始めて、もうすぐ半年が経とうとしています。私が、このボランティアを通して学んだことは「関係づくり」の重要性です。私はのびのび楽習塾にも通っている中国籍

の中学3年の生徒を担当しているのですが、彼と接することで当たり前前ことに気付くことができました。

彼は学校ではとても頑張っていると担任の先生から聞いていましたが、ボランティアを始めたときの印象は、彼が学校の先生にはいい顔をしているのかなと思いました。初回は先生と3人で話して、しっかりと受け答えをして話をしていました。二回目以降は彼と2人でやることが多く、徐々に慣れ始めたのか、少し姿勢を悪くしたり、宿題をやってこなかったりということがあったので強めに叱りました。そのときは、嫌われたらどうしよう、来なくなってしまうらどうしよう、と不安がありました。が、「自分がどう思われても、相手にとって良ければいい」と思って叱りました。彼はとても暗い顔をしていましたが、その後も継続して一緒に勉強することができてよかったです。2月の百人一首大会では、楽しめて成績も良かったということだったので、そのときは強めに褒めてあげました。最近では、毎日の日記を書いてくることを宿題にしているのですが、見せるのは菅野さんだけがいいと言っていたのを聞いて嬉しい気分になったのと同時に、私を受け入れてくれているなどと思いました。このように相手を考え、本気で叱ったり褒めたりすることで、お互いに理解し合ってとても良い関係が築けると思います。

このことは学校現場でも同じであると思います。生徒一人一人を常に考え、真剣に正面から向かい合うことで、お互いの関係性を築いていく。そこでやっとな「学習する」という行為が成り立つのだと、私は思います。

言い換えると、その生徒の親的な立場に立ち、ダメな事はダメ！良いことは良い！とはっきり言ってあげることと、相手の言いたいことはしっかり言わせてあげる。お互いに本音で言い合えば繋がりにくくても繋がるものがあるかもしれません。それはやってみないとわからないことです。ボランティアを通して気付いた「人間関係の重要性」は社会において当たり前なことだと思いました。私は将来、生徒一人一人と繋がり、そして全員と繋がった関係づくりを目指していきたいです。

【青少年の居場所】

出来ることを共に

経済学部3年 阿部 由希

ボランティアを始めて約2ヶ月が経ちました。率直な感想としては、あっという間の時間だったと感じています。私が参加しようと思った理由は、教師になろうとした理由と似ています。元々自分自身サッカーが好きで、これからも関わっていききたい気持ちがあり、小さな子どもたちも大好きだったことから、この両方を叶えられる仕事が教師だと考えました。しかし、大学で教職課程を履修している中で、子どもたちと関わっていく機会がないことに気が付きました。もっと子どもに触れ合いたいと思い、「青少年の居場所」に参加することにしました。

「青少年の居場所」では毎週火・金曜日に小学校の体育館でフットサルをしています。参加前のイメージは、小・中・高校生子どもたちと混ざってプレーするといった活動内容だと考えており、その中でいろいろな事話して、子どもと触れ合えるいい経験になると思っていました。

初めての活動では、まず驚いたことを覚えていません。その理由は、子どもたちの人数と同じくらい大人の人数が多かったからです。最初のイメージと違い、正直に言うと、ここで得られるものがあるのかと不安でした。実際、ただフットサルをして、いかに子どもたちとコミュニケーションを取ろうかばかり考えていました。しかし、ただ時間が過ぎ、何も動き出すことが出来ませんでした。その日の活動後に代表者に、「ここは積極的に話していかないと得るものは少ないと思う。自分ってのはこうだ！と表現していった方がいいよ」と言われました。私はこの言葉によって参加する気持ちが変わりました。子どもたちや社会人、他大生などに積極的に話しかけるようにしました。結果、自分になかった考えや知識を共有することが出来ました。

最初の頃は受け身の自分でしたが、回を増す毎に、自分が子どもたちに何か新鮮さを与えることが出来ないかと考えるようになっていきました。「今抱えている悩みはない？」などと、子どもに寄り添って聞いてみることにしました。そうすると「これはどうすべきだと思う？」と自然に子どもたちの方から聞いてきてくれるようになりました。フットサルなので、最近では、技や戦術などプレーに関することを教えたりもしていくように心がけています。そのように相手も思った自分の行動が、どのくらい影響を与えているの

か定かではありませんが、続けることによってさらにコミュニケーションを取ることができ、共に成長していくことが出来ると考えています。子どもたちや地域の他の大学生や専門学校生、社会人などと触れ合う機会が出来たことで、他のボランティアでは経験できない体験がたくさんあり、自分が成長できる場所であると感じています。だからこそ、これからも自分に出来ることを積極的に、他の人と共に歩んでいきたいと思っています。

ボランティアを通して見た私の成長

経済学部2年 渡邊 省吾

私は「青少年の居場所」というボランティアの活動を行わせていただいています。私が行わせていただいているボランティアの活動の内容は、火曜日と金曜日の週二日間、神奈川県内の小学校の体育館や、地区センターの体育館を貸し切って、フットサルをするというものです。一緒にフットサルをする相手は、小学生や中学生、高校生などといった年下の子供たちだけでなく、同年代である、大学生や専門学校生もおり、またそれだけではなく、年上である社会人の方たち、保護者の方もいらっしゃいます。私は初めて活動に参加した時は参加者の年齢層の幅の広さにとても驚きました。

「AT」や「のびのび楽習塾」などといった他のボランティア活動とは異なり、この「青少年の居場所」というボランティアは、子供たちとは先生・教師と生徒、教える側と教えられる側といった関係性はなく、子供たちに指導をするようなことはありません。そういうこともあり、社会的に常識であるようなことを教えたり、注意をしたりはしますが、ボランティアらしいボランティアではないかもしれません。最初は私もそのように思っていました。しかし、ある日子供たちと話をしたり、相談に乗ったりしているうちに、これも立派な一つのボランティア活動なのではないかと思うようになりました。子供たちのことを思う気持ちに差はないからです。

このボランティアは子供たちと触れ合えるだけでなく、年上の人たちからいろいろな話や経験談を聞かせてもらったり、進路についてのアドバイスをもらったりもでき、とても有意義です。

私はこれからもこのボランティアを続けていけたらいいなあと思っています。

○目次○

ボランティア通信

～松本中、六角橋中、戸塚中、戸塚高～

【松本中学校】

「子どもたちの成長を見つめて」 渡辺 定智	1
「教育現場の先生方の姿から」 永藤 理裕	2
「AT始めてみて」 松崎 優	3
「ATを通して学んだこと」 伊藤 伎恵	4

【松本中学校】

「子どもたちの成長を見つめて」

現代ビジネス学科 4年 渡辺 定智

私は平成23年の5月から現在まで、松本中学吹奏楽部のアシスタント兼アドバイザーとして活動してまいりました。そして本年度より、社会科のアシスタントティーチャーとしての活動をスタートしました。今回、過去2年の部活動での体験と、授業の場での体験をまとめます。

松本中学校を訪れてまず感じたのは、子どもたちがとても落ち着いていて、大人だということでした。外部の人間である私たちにもフレンドリーに話しかけてきてくれて、戸惑っていた私もすぐに学校の雰囲気になじむことができました。また、活動にも熱心で、先生方の言葉に素直に答える誠実さが感じられました。

吹奏楽部の子どもたちは、上下関係の隔たりがなく、家族のように打ち解けている姿が印象的でした。特に初年度の3年生はとても面倒見がよく、OBとなった今でも、演奏会のお手伝いや後輩への指導に来てくれます。しかし課題として、のんびりとしすぎる雰囲気が時に活動をルーズにしてしまうことがあります。そのことへの私なりの対策は後述します。

学級内ではあまり参観回数が多いので確かとは言えませんが、全体的に学びに対する意識は高いと感じました。これからの活動の中で、子どもたちへの的確なサポートを心がけます。

部活動では早くも3年目に入り、当初1年生だった子たちが部活をひっぱり手となりました。その中で子どもたちの成長のスピードの速さに驚愕しました。それは楽器の技術のみならず、人間的な成長も大きいと感じています。その成長に立ち会えたことこそ、教師を目指す私の一番の学びであると感じています。

また、様々な子どもがいるということを痛感する機会ともなりました。不器用だけど一生懸命な子、なかなか部活になじめず辞めてしまう子など、書ききれないほどです。その度に思うことは、子どもに対する対応は1つではないということです。顧問の小澤先生は、時に熱く、時に冷静に、子どもたちの成長の機会を的確に見極め、サポートしている様子でした。一番印象的だったのは、私が子どもの対応に困っているときに、先生の思い切った判断や一言で、子どもが納得して動き出すということでした。

【六角橋中学校】

「学校ボランティアから学んでいること」 萩原 智也	5
「学校ボランティアを通して学んだこと」 下里 瑞希	5
「学校ボランティアから学んだこと」 鈴木 隼人	6

【戸塚中学校】

「新しい取り組み」 小高 敬史	7
「『個』に応じた指導は生徒の集中力につながる」 松本 大輝	7
「『土曜塾』のボランティア」 守山 涼	8
「ボランティアを始めてみて感じたこと」 中谷 智美	8
「ボランティアで学んだこと」 馬場 成美	9

【戸塚高校定時制】

「2回の『学び直し』のサポートを終えて」 埴 和徳	10
------------------------------	----

ボランティア通信
～松本中、六角橋中、戸塚中、戸塚高～

それはおそらく、先生がこれまで培われてきた経験が、瞬時に正しい判断を導き出しているのだと思います。私は現場の先生方や子どもたちとの触れ合いによって、「経験」というこれから解決すべき課題を見出すことができました。

「経験」を補うためには、自ら率先して行動することが求められると思います。この体験を通して、教師になってからの研修がすでに始まっているという意識を大切にします。また、これまでは子どもから学ぶことが多く、自分自身が何かを伝えるという姿勢に欠けていたと思います。音楽面の指導のみならず、基本的な挨拶、返事、早め早めの行動など、今私が感じている課題を子どもたちに伝え、子どもたち主体の解決を目指します。今の松本中吹奏楽部に足りないものを、子どもたちと一緒に考えて、より良い部活にしていけるように努力します。

授業では教育実習の経験を活かしながら、先生方の授業を自分なりの視点でしっかり分析して、「私ならこうする！」という積極的な姿勢で参観します。また、子どもたちの様子に目を配り、先生方の机間巡視の技法についても注意深く研究したいと思います。

松本中学での体験から学ぶことは、教師になって教壇にたってからも活かせることばかりだと感じています。1回1回を大切に、未来の自分の教え子に向けた学びを、積み重ねていきたいと思えます。

教育現場の先生方の姿から

法律学科 4年 永藤 理裕

松本中学校で学生ボランティアを始めてから、1年半が経ちました。週に1日だけの活動ですが、社会科の3人の先生方の授業に入らせて頂いて、大学では経験できない様々なことを体験しています。これまでの活動を振り返って、先生方の姿から学んだことと、新たに見つけた私の課題を述べていきたいと思います。

ボランティアをする中で、先生方の姿を見ていて学んだことは「生徒の言葉を引き出す」ということの大切さです。松本中学校では、学年があがっても授業中に積極的に発言をする生徒の姿を多く見ることができます。これは、日頃から先生方が折に触れ、生徒に考えさせたり自分の言葉で発表させたりしてきたことが授業に表れているのではないかと思います。先日の授業では、“自分だったら幕府をどこにおくか”というテーマで班ごとに話し合う展開がありました。それぞれの班が異なる視点から適当な場所を探していて、授業で生徒一人ひとりの意見が大切にされているということを感じました。発言の回数も確かに多いですが、「生徒の言葉を引き出す」ということの裏には「生徒一人ひとりが自分の考えをもって授業に臨めるようにする」という先生方の想いのようなものがあるのだろうと思います。自分の意見や考えをもって課題に取り組むということは、これからの生徒の人生に必ず役に立っていくものであり、私も授業を行う上で大切にしていきたいと考えています。

先生方の姿を見て、自分自身を見つめ直したこともありました。それは生徒と接するときの態度です。生徒同士でトラブルが起きた時、先生方は頭ごなしに叱りつけるのではなく、生徒の話をじっくりと聴いていました。私は、その先生方の姿を見て、自分に生徒を理解しようとする姿勢が欠けていたことに気づきました。ボランティアの中で、廊下を走る生徒や授業中に私語を交わす生徒を見た際に、話を聴かずにとりあえず注意をしてしまうということがあります。しかし、まず生徒の話に耳を傾けることで、理解しようとする努めということが大切なのだと感じました。

教育実習をする日が近づいています。これまでの活動で学んだことを活かし、見つけた課題を意識して活動ができるように、実習にあたっては積極的かつ慎重な姿勢を忘れないようにしようと考えています。ボランティアでは、大学ではできない学びをたくさんさせていただきました。それら一つひとつを大切に、これから更に努力を重ねていこうと思っています。

ATを始めてみて

法律学科 4年 松崎 優

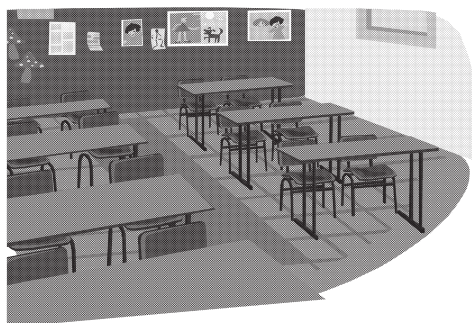
私は今年の四月から松本中学校で社会科のアシスタントティーチャーとしてお世話になっております。活動を始めてまだ一か月かそこらしか経っておらず、環境によりやく慣れてきたというのが正直なところですが、けれどもこんな短い中で、松本中の生徒たちは暖かく私を迎え入れてくれて、廊下ですれ違えば挨拶をしてくれますし、休み時間教室にいるときには話しかけてくれたりもします。この通信を書いている今は教育実習直前で、来週からしばらく松本中の生徒に会えないと思うと少し寂しさを感じてしまいました。

ボランティアの活動を行うなかでまず私が感じたことは、授業中居眠りをしていたり、教科書やノートを開かずやる気がない生徒を、どう学習に参加させるかでした。注意して嫌われてしまったり、聞き入れてくれなかつたらどうしようなどの不安がありました。けれどもそんな時には、私は四月教育実習指導の講演で来ていただいた先生の「厳しいの反対は甘い。優しいの反対は冷たい。優しくして厳しい先生を目指してほしい」という言葉を思い出して、その生徒へ注意をしてみることにしたのです。ここでちゃんと注意しなければこの子のためにならない、そんな思いが私の中にはありました。その子は注意を受けると「だるい、眠い」と最初は乗り気ではなかったのですが、それでも諦めずに接していると授業に参加してくれました。

公民の授業においてはM先生に毎回スピーチの機会を設けていただいております。このスピーチは当日授業中に振られることが多いので、最初のうちは戸惑うことが多かったのですが、四回目にもなると即座に話を纏めて行えるようになりました。もちろん、生徒へわかりやすく伝えられるような工夫や、難しい言葉を使わずどう説明するかの配慮、もっと言えば知識不足などまだまだ未熟な点があります。実際の学校現場では生徒からとっさに質問が飛んでくることは多々あります。それがこちらの予想外なものであることはほとんどかもしれません。臨機応変に様々な物事へ対応する力が身につけられるので、M先生が与えて下さるスピーチの機会は、

生徒以上に自分が成長できるような場ではないかと私は思っています。

松本中学校での活動は毎回新しい発見があります。まだ行ったことが無いクラスでの授業や、話したことの無い生徒との会話。学年やクラスが変わればそこには別世界が広がっていると言っても過言では無いほどに、多種多様な光景がそこにはあります。地理の時間高校入試レベルの練習問題を先生が持ってきて、一年生は今解けなくても二年後には解けるようになってくださいと先生が仰り、私は二年後この子たちがどう成長を遂げたのか見てみたいと感じました。二年生では入学当初の緊張感や受験前の緊迫感はなく、少し落ち着きがあるように見えます。三年生はさすが最高学年、あいさつや授業態度など基本的な生活習慣がしっかりと身につけているように感じました。これからの活動の中で子どもたちがどうなっていくのかしっかりと見守り、関わっていききたいと思います。



ボランティア通信
～松本中、六角橋中、戸塚中、戸塚高～

ATを通じて学んだこと

英文学科 3年 伊藤 伎恵

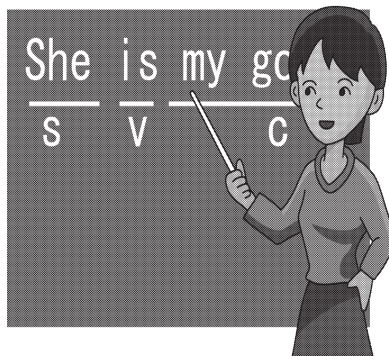
私は今年の4月から、毎週火曜日の午前中、英語科のATとして松本中学校へ行かせていただいております。ATではじめて教室に入った時思ったのは、私には教える立場であるという意識が足りないことです。実際に現場で働く先生たちの姿を間近で見て、今までは生徒という、教えてもらう側の立場にいたため、受け身の姿勢でばかりいましたが、今後はATを通して教える立場になるという意識を持って行動しなければならないのだと実感しました。

私ははじめてまだ日が浅く、今は1年生を担当している先生と2年生を担当する先生の2人の先生についてATをしています。内容は主に授業についていけない生徒への対応と、プリントの配布やワークのチェックなどです。まだあまり生徒と長い期間関わっていませんが、そのなかでわかったことは、私は生徒のことをちゃんと見られていないことです。今まで教員免許取得のために教職課程を続けてきたけれども、教師は生徒に教えることが仕事だから、先生がどのような教え方をしているのか、どんなふうに教えたなら効果的かということばかりに目を向けてきました。しかし、実際はどのように教えたらいいいのか、効果的かということもクラスによって、また生徒によってそれぞれ違うように感じました。つまり生徒にとって分かりやすい授業をするには教師が生徒を理解することが大事であることを学びました。そのため、自分も今後ATを通して、生徒と触れ合いながら、生徒がその日どんな様子だったか、授業にどんな反応を示しているかを注意して見ていきたいと思っています。

また、最近では、はじめて生徒の前に立って読みの練習をするよう任されました。私はスピーキングがあまり得意でないため、やはり読み終わった後、先生に棒読みになっていることを注意されました。私が生徒だったころは、ただ普通に先生が言った英文をリピートしていただけだったのに、教える立場に

なると、先生たちは生徒にとって読みやすくするために、短い文章の中でもこんなにも工夫していたのかと、驚きと同時に教師という仕事の大変さを痛感しました。そのため、今後は感情をこめて、抑揚をつけた読みができるよう、普段の授業から意識していきたいと思います。

教員免許取得のために勉強しなければならないことはたくさんありますが、これらのことは学校ボランティアをしていなければわからなかったことです。ATをやらず、普通に学生生活を過ごしていたら、生徒や自分自身に対する気付きや発見もなかったと思います。学校ボランティアを通して貴重な経験ができていることを意識しながら、向上心を持って、今後もATに取り組んでいきたいと思っています。



【六角橋中学校】

学校ボランティアを通して学んでいること 科目等履修生 萩原 智也

私は、毎週月曜日に横浜市立六角橋中学校にボランティアに行かせてもらっています。

活動内容は、体育の授業を主に勉強させてもらっていて、体育が苦手な生徒についてフォローして一緒に走ったり、倒立の見本をみせたりなどしています。

学校の特徴としては、全校生徒が800名以上もいて、体育の授業は、クラスも多い分、3~4クラス合同で行い、種目ごとで中の競技や外の競技に分かれて行っています。

体育の授業で興味深く感じていることは、多数の生徒たちを一度にまとめなければいけないので、特に外競技の場合、先生方は学校中に響くような大きくはっきりした声でお話をしています。また、授業の始まりと終わりのあいさつを徹底しているため、六角橋中の生徒は、元氣よくあいさつをしてくれるので、すごく元氣をもらえます。

それから、授業の終わり5分間の振り返りチェックシートです。授業で何を生徒が目標にして練習に取り組んでいるか、できたこと、できなかったこと、次の時間では何をして取り組んだらいいのかを生徒自身が活動のフィードバックをすることで、意識を持って授業に参加して、生徒が楽しく活発にスポーツをしているのが六角橋中の体育授業の特徴です。体育の授業では、実技のことだけに目がとらわれがちですが、実技以外の所（ここでは振り返りシートのこと）で、生徒の状況を確認している授業の行い方は新しい発見でした。

放課後は、私自身が大学で体育会ソフトテニス部に所属していたため、女子ソフトテニス部の指導にも関わらせてもらっています。はじめは、誰だかわからないけど、テニスをやってた大学生なんだ、という雰囲気の中でなかなか打ち解けられない場面もありましたが、練習を一緒に行っていく中で、困っている選手に声をかけたり、アドバイスをしてくと、段々と馴染んでいくことができました。その反面、生徒たちに端的に理解しやすい指導をしなくてはいけないので、自分の知識、指導力を更に深めていかなければいけないな、と思いました。

六角橋中でのボランティア活動は、生徒の成長と共に

自分自身も成長できる所に魅力を感じています。6月からは、教育実習も始まります。現場で学べることに感謝し、先生方の指導をみて、多くのことを吸収して、自分の力にしていきたいと考えています。

学校ボランティアを通して学んだこと 英文学科 4年 下里 瑞希

私は昨年度の10月から、横浜市立六角橋中学校のATとしてお世話になっています。以前は午前中のみの活動でしたが、今年度からは毎週月曜日に一日活動をさせていただくことになり、英語の授業以外でも先生方や生徒と関わる機会が増え、とても充実した日々を過ごしています。最近では、担当しているクラスの生徒や昨年度に授業で会った生徒に声をかけられることも多くあり、回数を重ねるごとに生徒との距離が徐々に縮まりうれしく感じています。

ATの活動では、主に二年生の英語の授業で、机間巡視と英語が苦手な生徒への補助、生徒がノートやプリントに英語を書き込む際のスペルの間違えなどのチェックを行っています。カンマやピリオドを忘れたりスペルを間違えたりする生徒が何人かいるので、正しい書き方を覚えられるよう適切に補助できるよう心がけています。また、授業の空き時間では、生徒の提出したワークシートの丸つけなども行っています。その際に、ただ単にチェックを行うのではなく、どの生徒がどのような解答や間違えをしているかを把握することが大切だということを学びました。授業中のワークやワークシートの演習の際には、生徒から質問されることがよくありますが、その時には堂々と答えるものの、振り返ってみるとこのように説明すればもっとわかりやすかったかもしれないと感じることがあります。生徒がどこまで理解できているのかを把握しなければ、その生徒にとって適切な指導が行えないということ、自分の発言に慎重にならなければならないということを改めて感じました。

授業以外では、下校指導などもやらせていただくのですが、先生方が学年を問わず生徒に声をかけたり、生徒とコミュニケーションがとれる場で

ボランティア通信

～松本中、六角橋中、戸塚中、戸塚高～

あるとともに生徒の様子や交友関係などを知る機会でもあるということに気づきました。普段あまり接する機会のない他学年の生徒ともあいさつを通してふれあうことができるので、私にとって有意義な時間です。

ATとしてのボランティア活動は、毎回新たな発見や感動がたくさんあります。週一回ではありますが、こうした貴重な経験をさせていただきながら、先生方の姿を見て多くのことを吸収していきたいです。

学校ボランティアから学んだこと

人間科学科 4年 鈴木 隼人

私がボランティアに行かせていただいている六角橋中学校は、市営地下鉄の岸根公園駅と片倉町駅のちょうど間に位置し、「学習活動」「学校行事」「部活動」の3つの柱を大切にしている学校である。また、近くに岸根公園があるが、部活動や体育の授業で岸根公園を利用した岸根ロード（長距離走）などにも取り組んでおり、学習指導要領に示されている「体力の向上」にも力を注いでいて、とても活発な学校である。

私はそこで中学3年生の学級と体育の授業のボランティアとして週1回入っている。昼から自分の部活動があるため午前中だけのとても短い時間ではあるが、これから教師を目指す私には学ぶことがとても多い。このボランティアの目的は、とにかく教師の働きというものに着目することだった。そうすることで生徒に対する態度や声かけ、授業中での指導法やアドバイスや学級経営や掲示物など、今の学校の現状というものを肌で感じることができ、いいものをたくさん吸収できた。特に体育の授業を客観的に見て学ぶことによって、どのような授業をして、どんなことに気をつければいいのか自分なりに考えることができた。

体育の授業で大切なのは運動の喜びを体験させることではないかと思った。運動が好きだ、自ら進んで体育の授業がしたいと思わせるのが必要だと感じたからである。なぜこのように思ったのかというとボランティアをしているとき、ある一場面を見たからである。中学2年生の器械運動の授業のとき、開脚とびができない生徒に対して先生が「まずどうしてできないんだと思う？」と聞き、それに対して生徒が「踏切り板が使えていないからだと思う。」と答えた。先生は

踏切り板の使い方を教え、もう一つ手のつく位置のアドバイスをした。その生徒は何回も練習して首をかしげながら自分で考えたり、友達に見てもらったりしながら繰り返し取り組んでいると、開脚とびができるようになった。それを見ていた先生や友達と一緒に喜んでいて。この場面を見たときに、体育の授業の最も大切なところはこれなのだろうなと思った。なぜなら年度初めにこのようなできる喜びを体験できた生徒は「やればできる」という気持ちで学習することができ、これからの体育の授業のみならず他教科などにも自ら積極的に自信を持って取り組んでいくことができるからだ。また、教師—生徒、生徒—生徒のなかで喜びを共有することで一体感や信頼感が生まれ、それがやがて学級経営にもつながっていくと思う。現にその先生のクラスはとても一体感があり、体育祭でも学年優勝していたので、つながっているんだと確信した。

他にも学んだことはたくさんあるが、とにかく先生の働きは授業に尽きるなど感じた。私も授業というものを大切にして、この学校ボランティアで学んだ運動の喜びを体験させることができる授業をしていきたいと思った。また、今回の学校ボランティアでは生徒とコミュニケーションがあまりとれなかったので、積極的にコミュニケーションをとり、生徒と正面から向き合える教師を目指して努力していきたいと思う。



【戸塚中学校】

新しい取り組み
支援室スタッフ 小高 敬史

私は、毎週土曜日に横浜市立戸塚中学校で行われている「土曜塾」というボランティアに参加している。ボランティアに参加して今年度で3年目を迎えたが、今年度は昨年までとは運営の方法を変えている。というも、今年度は参加する生徒が増えたため、時間を区切り1時間交代で2回の授業をしている。今年度私は主に2年生の生徒4人に数学と理科を教えているが、時間が短くなった分昨年よりできることは少なくなったので、現在は生徒と話し合いながら少しずつ授業の形を作っている段階である。

その中で、今年度は自分自身の今までのやり方も少し変えて新たな取り組みを行っている。昨年までは、始めから終りまで同じ生徒を見ていたので自由に時間配分と教科を決め、生徒の要望にこたえながら授業をしていた。このやり方は、自由度が高い分生徒の要望にこたえやすいが、生徒からの要望がない時や生徒のモチベーションが低い時だらけてしまうことがあった。また、様々な教科を教えていたため、ボランティアもその場で生徒の要望にこたえなければならなかったので準備不足のまま授業をしているときがあった。そこで今年からは教科を絞って授業の最後に生徒から翌週のやりたいことや要望を受け付け、その分野の教材をこちらが用意するというやり方を行っている。まだ、2、3回しか授業を行っていないので目に見える形で成果は出ていないが、生徒からは、「時間が経つのが速い」「ようやく理解できた」という言葉を聞いて私自身は少し手ごたえを感じている。

また、2年間「土曜塾」に参加していて「土曜塾」のスタイルが生徒のやりたいこと、分からないことを基に授業を展開していくため、どうしてボランティアは受け身になっていた。そのため、生徒のモチベーションを保つのに苦労したり、どの程度まで分かっているのか分からないまま授業をしていた。しかし、今年のやり方だと教材を用意しているので、事前に予習復習もできるのでボランティア自身のモチベーションにもつながっている。

今年度はまだ始まったばかりで、新しい生徒との

関係づくりも授業のやり方も工夫していかなければならない点や私自身の改善点もまだ多くある。しかし、「土曜塾」のやり方も変わり、私自身も新たな取り組みを始めたところなので少しずつ形にして生徒にとって分かりやすい授業にしていきたいです。

「個」に応じた指導は生徒の集中力につながる
人間科学科 4年 松本 大樹

私は、現在、横浜市立戸塚中学校で毎週土曜日に活動が行われている「土曜塾」でボランティアをしている。活動内容は、生徒1人1人の課題に合わせた学習支援を、9時から9時50分までと、10時から10時50分までの2つの時間帯に分けて行っている。基本的には、生徒とボランティアの先生の1対1であるが、今年度は人数が多いため、ボランティアの先生1人に対し、生徒が2～3人割り当てられている。活動場所は、学校の図書室を使用している。

今年度、私は、9時からの時間帯に1年生の女子生徒を2人、10時からの時間帯に3年生の女子生徒2人を受け持っている。どちらも生徒それぞれの課題に合わせたプリントなどを私が毎週用意するようにしている。1年生の生徒は、数学で個別に苦手だと生徒本人が感じている個所を中心に指導している。そのため、2人同じ時間帯に同じ机で一緒に勉強しているが、勉強している内容は異なる。それに対し、3年生の生徒は、理科で現在学校の授業の中で学習している範囲の復習を、プリントを活用して勉強している。私は、それに対して解説を行う形式をとっている。3年生の2人は同じプリントを使用しているため、勉強している範囲が同じである。これら2つの時間帯で気づいたことは、生徒の勉強への集中度の違いである。

1年生の2人は、お互い違うことを勉強しているにも関わらず、お互いに何をしているのか気になる様子もなく、集中して勉強に取り組んでいる。しかし、3年生の2人は、同じプリントに取り組んでいるせいか、どのくらい進んでいるかが気になるようで、相手の方をちらちら見ている、勉強に集中しきれていないのが感じられた。どちらの時間帯の生徒も、2人が友達同士で、活発でよくしゃべる子たちなので、1年生は

ボランティア通信

～松本中、六角橋中、戸塚中、戸塚高～

まだ仲良くなれていないからということでの違いではないと考えられる。私は、2人で勉強していると、違うことに取り組んでいる方が何をやっているのか気になるものだと考えていた。そのため、この2つの時間帯の生徒の違いには驚いた。1年生の2人の方が集中して勉強に取り組んでいることから、私は、自分だけの課題、自分にとって苦手な個所を学習することで、「自分対先生」という世界を生徒が確立することができるのだと感じた。その世界には、たとえすぐ隣で違うことを学習している生徒がいても、「相手に追いつかなきゃ」、「遅れてはいけない」といったことを気にしないで済むので、集中して自分の学習に取り組める。

「相手の進度に追いつかなきゃ」、「遅れたくない」と、同じプリントで学習している生徒が感じて、気になってしまうことから、私は、もう一つ、現代の中学生が強く感じている、「相手に合わせなければならない」といった考えが、学習に影響を与えているのだと考える。生徒に集中して勉強してもらうには、「集団」の指導ではなく、「個」に応じた指導が大切であると強く感じた。

学校ボランティア 現代ビジネス学科 3年 守山 涼

ボランティアを始めて、早くも九カ月が過ぎてしまいました。子ども達の笑顔というのは本当に癒されます。やはり、子ども達（中高生）は好奇心旺盛で何でも知りたがりです。土曜塾でも、勉強面以外にも時事問題や、将来の夢などの話をして毎週、充実した日々を送っています。

最近思う事として、自分たちが中学生だったカリキュラムと違い、今の中学生は、本当にレベルが高く特に数学は、高一で習う分野が中学生に繰り下げられ、生徒はよりハイレベルな勉強をしています。生徒たちは理解力が早いと思う事があります。

私は、英語を教えているのですが、自分が教えているポイント（要点）を生徒が「ふーん、こんなの知っているよ」と顔をしたので「よく復習しているな」と感心してしまいました。

土曜塾でたまに生徒に、確認テストをしてもらい定着度を測っています。そして生徒が一問も間違える事なく、確実に解いている姿をみて「本当に今の生徒は

真面目だな」と感じる事が多いのです。

ただ、気になる事もあります。「分からない所はあった？」と聞くと生徒は小さな声で「大丈夫です」と言い、自信なさげなのが気になりました。それが本当に理解できたのかよく分からないのですが、「本当に何も無いの」と聞くと、「やっぱりある」と言うので、私は「分からない問題があったらすぐに質問して。」と言いました。「自分の意思表示をきちんとしないと、社会に出たときに困る事になるよ」と言っています。

教える場合、丁寧に、分かりやすい授業の展開し、生徒が「あっそうか、理解できたぞ」と思えるように一生懸命頑張って指導したいと思います。

どの科目もそうですが、「分かりやすい授業」というのは大前提です。その上で、生徒達が退屈しないように面白みを混ぜて授業についていけると感じます。

英語は、ただ文法や単語をひたすら暗記するのではなく、英語の本を読んだり、日常会話の一部を少し英語で話してみたり、洋面をみるだけで英語というものが身近になり、面白い科目になると思います。

今や、英語は「世界共通語」です。毎日少しずついいから勉強をすると、いつのまにか英語がわかるようになります。

「英語は、学べば学ぶ程頭に残り、仕事をする上で必ずなくてはならない科目なんだよ」と伝えていきたいです。

学校ボランティアを始めてみて 感じたこと

英文学科 2年 中谷 智美

私は今年の6月から毎週土曜日に横浜市立戸塚中学校で土曜塾のボランティアをしています。今までの2回のボランティアを通して学んだことを述べたいと思います。

私は2回のボランティアで、英会話・英文法と数学の時間の見学とサポートをさせてもらいました。英会話の時間の生徒の様子を見学して思ったことは、英語を話すときの声が小さいということです。これは、英語を話すことを苦手に思う気持ちがあること、恥ずかしいと思う気持ちがあることと、第二言語である英語に自信がないということが関係していると思います。そのため、英語を話すことが苦手だ、恥ずかしい

と思うよりも楽しい、自信を持って話せば伝わると思ってもらえるように基盤となる発音と会話の練習を繰り返すといった工夫をしたいです。また、英会話の時間は一年生から三年生までと一緒に教えているため理解度にばらつきがあるので、どのような内容を教えるかが問題になると思いました。英語の力も学年に限らず個々で異なるので、生徒一人一人が理解できているのかを確認しながら進める必要があると感じました。生徒と教える側が対面で会話をして教わったことの確認をしていたのですが、時間を持って余っている生徒もいたので、生徒間でも習った内容を使って会話をするように促して、英会話を楽しみながらも実際に使えるものにさせたいと思いました。私自身も英語の子音の発音など、発音が曖昧などところがあるので、教えるという責任感をもって、どのように教えたらいいのかを考えながら、英語の勉強により一層力をいれたいです。

数学の時間では、特に生徒の考える力、発見する力を引き出すためにはどこまで助言をしてあげるかをという点に気を付けなければならないと思いました。生徒が解き方を発見したとき、閃いたときの気持ちが学習において大切だと感じたので、上手に導けるように私も学んでいきたいと思えます。

私はボランティアを始めたばかりなので、まだ主に見学しかしていないのですが、その中から感じたことを今後のボランティアに反映させたいと思います。また、土曜日にわざわざ来てくれている生徒に少しでもプラスになることを教えられるようにしたいです。ボランティアの回数を重ねるたびに工夫を加えてよりよいボランティアができるように改善していきたいと思えます。

ボランティアで学んだこと

英文学科 2年 馬場 成美

私は今年の6月から横浜市立戸塚中学校の土曜塾で学校ボランティアとして活動しています。現在、一年生二人と三年生二人の数学を担当しています。まだ、二回しか活動に参加できていませんが学ぶことがたくさんあります。

まず私が土曜塾のボランティアに参加しようと思ったのは、直接生徒に勉強を教える機会が必要だと感じたからです。私は教師を目指しているのにもかかわら

ず、生徒に勉強を教える経験をしたことがありませんでした。また、大学は授業の仕方を学ぶことはできますが、本当の生徒を相手に勉強を教える経験をすることはできません。このボランティアを通して大学では学ぶことができないものを経験し学ぶことができればいいなと思い参加しました。

一回目の土曜塾の活動は先輩とふたりで一年生と三年生それぞれ二人の生徒に勉強を教えました。初めての授業だったので、どのように教えていいのかわかりませんでした。その日三年生は理科の復習をしていたので自分自身問題の解き方がわからず先輩に助けを求めてばかりでした。しかし、先輩の教え方や生徒とのコミュニケーションの取り方など学ぶことがたくさんありました。

二回目は一年生二人を一人で担当することになりました。この日はそれぞれ課題を持ってきてもらい、わからないところを聞くという形式で行いました。自分の教え方で生徒たちに理解してもらえたのか不安ですが、一回目に比べたら生徒たちとのコミュニケーションはとることができたと思います。生徒たちは積極的にわからないところを聞いてくれるので、私も教えていて楽しかったです。

この二回の活動で私が感じたことは、自分自身の予習の大切さです。生徒に教える立場であるのに、自分がわからないというのはあってはならないことだと思いました。今後は自分が用意するプリントや教科書で生徒たちがどこにつまずきやすいだろうか、どのように教えたらわかりやすいだろうかなども考えて予習していきたいと思えます。また、一人で数人を教える大変さも学びました。一人だけに集中してしまうとう一人のほうがかたくなってしまいうということが度々ありました。それぞれ異なったことを学習しているので二人同時に見ることはできませんが、できるだけ交互に見ることができるようにしたいと思えます。

土曜塾のボランティアの経験は教師になるための勉強として今後役に立つものだと思うので積極的に参加して、今後に生かしていきたいと思えます。

ボランティア通信
～松本中、六角橋中、戸塚中、戸塚高～

【戸塚高校定時制】

2回の「学び直し」のサポートを終えて 科目履修生 埜 和徳

戸塚高校定時制において、学び直しのサポートの学校ボランティアを2回終えて考えたことを記したい。

まず、小学校の復習から行なっている学びなおしをサポートしてみて、自分自身にとって軽いカルチャーショックであった。高校生で、小学校の復習をしなくてはならない状況が、あまり想定していなかったことだったので、自分自身認識を新たにさせられた。卒業のあと就職する生徒が多いので、履歴書など、就職のための書類を書く字を丁寧に綺麗に書く練習をしている、就職試験に必要な内容にもなっているのだという話をきいて、納得した。

また、情緒に不安定さがあるのか、間違いを指摘したら怒りの声をあげる生徒もいた。しかしすぐに間違いを認識し、次の作業に移っていったので、ひとまずは安心した。これからは、情緒に不安定さを抱えている生徒もいることを十分認識しながら、サポートに当たりたいと思った。

クラスによって、複数桁の掛け算のなかで、特殊なところに繰り上がりの数字を書くように教わっているクラスもあった。それは、指導の先生が、過去にあった間違いを生徒に起こさせないようにするためだという話である。このように、独自の指導があることが事実だが、自分なりに納得しながら、生徒に指導していきたい。

主に数学についてだが、次第に中学校の内容にも進んでいくことがわかったので、中高の免許をとる自分にとって良い経験になることを期待している。また、英語の件に関しては、自分自身わすれている内容もありそうだということがわかった。これからしばらくしたら、その範囲にも突入するので、自分なりに復習しながら指導して行きたいと思った。



発行日：2013年 7月1日
発行所：教職課程支援室
電話 045-481-5661 (内線4228) FAX 413-4154 Email: tcr-yokohama@kanagawa-u.ac.jp

発行日
2013年7月1日

学校ボランティア通信

～老松中学校&栗田谷中学校&港中学校～

○目次○

【老松中学校】

人間科学部4年 青木友美 「本気で、諦めずに向き合うことの大切さ」	1
--------------------------------------	---

【栗田谷中学校】

外国語学部4年 室井博史 「ボランティアで学んだ生徒との信頼関係」	2
法学部4年 早川真央 「連携して行うことの重要性」	3
外国語学部4年 安田喜子 「生徒理解の大切さ」	4
外国語学部3年 徳永上総 「生徒と教師の関係 ―人と人として―」	5
人間科学部3年 野崎貴裕 「学校ボランティアで学んだこと」	6
人間科学部2年 矢島芽以 「特別支援学級の生徒に触れて」	7
経済学部卒業生 大西崇文 「ボランティアを通じての自分自身の成長」	8

【港中学校】

経済学部4年 土屋萌子 「ボランティアから見えた理想の教師像」	9
工学部4年 佐久間克紀 「授業中の雑談って何のため？」	10

～老松中学校編～

「本気で、諦めずに向き合うことの大切さ」

人間科学部4年 青木 友美

5月から老松中学校でのボランティア活動が、再び始まりました。その活動内容は、学習に課題があり特別な支援が必要な生徒へのサポートです。一昨年の5月から始めさせていただいているので、今年で3年目になります。

3年目を迎えることが出来たのは、たくさんの方の支えと生徒の笑顔があるからだと感じています。まず、たくさんの方というのは、老松中学校の先生方、神奈川大学の先生方、また場所は違っても学校という場所でボランティアをしていて喜びや悩みを分かち合うことのできる仲間存在です。皆さんの存在に何度も助けられました。そして、生徒の笑顔の裏側には一人ひとりの成長があります。修学旅行をきっかけにクラスに入れるようになった生徒、学校に来る日が段々と多くなり授業にも参加することができる生徒、自分の好きなことを見つけ一生懸命に取り組める生徒、成長の仕方や方向性は異なりますが、個々の発達プロセスに本当に感心させられます。

しかし、すぐにその成長は現れず、生徒たちは時間をかけ、ゆっくりと前進しています。少し後戻りしたり、立ち止まったりしながらも、確実に成長していく生徒を前にして、いつも「本気で、諦めず、向き合うことの大切さ」を実感します。その日1日の中で成長が見えたなら、もちろん幸せですが、結果をすぐには求めません。その日の中で結果が見えなくても、それが当たり前のことだと思っています。生徒の可能性を信じ、期待をしていると、成長を待つことが難しくなり、焦りになってしまうと思いますが、日々の積み重ねがあつて、それがいつか実

を結ぶことを生徒が教えてくれました。

また、生徒が登校してくるまでに時間があるときには、生徒が興味・関心を持つような教材研究をし、また私がボランティアとして参加させて頂いている日にち以外の生徒の様子を先生方と共有します。空き時間も大切な時間です。

最後に、生徒を前にしたとき、年下だからといって、不要な手加減や甘えがないようにしています。だからといって、不本意に厳しくはしませんが、可能性を最後まで信じ、本人の気持ちを尊重することを心がけています。真摯に向き合うことで生まれる信頼関係を基盤として、生徒の行動をそつと見守ることもあります。ここで意味する「向き合う」とは、積極的にコミュニケーションを図ることもそうですが、生徒の言動を待つということも含まれます。

毎日を生きていれば、昨日と今日が同じということはありません。したがって、私も臨機応変に対応し、生徒の成長の手助けができればと思います。



～栗田谷中学校編

ボランティアで学んだ生徒との信頼関係

外国語学部4年 室井 博

私は今年の3月から毎週木曜日の午前中に、横浜市栗田谷中学校で英語のアシスタントティーチャーとして活動しています。ボランティアを始めた最初の頃は、初めての環境で生徒たちとも初対面だったので正直不安しかありませんでした。しかし、ボランティア活動を続けていく中で、生徒の明るさや良いところを様々な場面で発見することができて、いつしか自然と不安もなくなっていました。今では、廊下で生徒たちに会うと「室井さん」と言って話しかけてくれる生徒もいて、着実に人間関係が築かれているのを実感しています。お世話になって約3ヶ月が経ちましたが、中学校の英語教員を目指す私にとって、実際の教育現場で授業や生徒たちと関わることで、非常に多くのことを学びました。

私は主に英語のアシスタントティーチャーをしています。授業中は特に英語が苦手な生徒への補助を行っています。その中で私はある生徒の補助をすることになりました。その生徒はよく英語の授業中に居眠りをし、起きていても教科書やノートを開こうともしない生徒でした。最初は私が話しかけても反応がないことが多かったのですが、ここで諦めてはいけないと思います。毎週その時間はその生徒の補助をしています。休み時間も雑談などをして地道に人間関係を築いていきました。こうした会話のなかでその生徒は私に「英語は読めないから嫌いだ」と打ち明けてくれました。今では、その生徒に対して発音の指導を丁寧に行っており、その結果、その生徒が授業で寝ることはなくなりました。この経験から、生徒理解には諦めずに努力をすることと、生徒一人ひとりときちんと向き合う姿勢が大切であると教えられました。しかしその一方で、まだ信頼関係が築けておらず、授業中の補助が困難な生徒がいます。その子に対しては決してあきらめることなく、地道に信頼関係を築いていけたらと思います。

英語の授業を見させていただくと先生方の授業づくりや生徒への発問の仕方など非常に学ぶことが多く、わたしもこのような素晴らしい授業をしたいと思いました。特に印象的だったのは、授業の中で教員が頻繁に英語を使っていたことです。学年やレベルに応じて教員も使う英語のレベルを調整しているので、生徒たちも

無理なく英語を聞き取ることができるのだと思います。改めて、英語教員には高い専門性が求められているのだなと思いました。また、実際に栗田谷中学校の生徒たちの英語力は高いので、こうした先生方の試みが実を結んでいるのだなと感じました。

これから私は教育実習に行きますが、栗田谷中学校で先生方と話したことや生徒たちと触れ合ったことは私の中でとても自信になっています。教育実習では栗田谷中学校で学んだ生徒一人ひとりときちんと向き合うことや授業の流れや生徒たちへの発問の仕方などを活かしていきたいと思えます。そして、少しでも栗田谷中学校の先生方のようなプロの教員に近づけるようにこれからも精進していきたいと思えます。

「連携して行くこと」の重要さ

法学部4年 早川 真央

学校ボランティアを始め、約一年が経ちました。朝の挨拶を交わす中で知っている生徒の顔も増え、栗田谷中学校に馴染んできた実感と共に、教師に求められる資質や能力について以下のことを学ぶことができました。

まず一つ目は主に特別支援学級の支援を通して、保護者との連携が生徒の成長に関してとても重要であるということです。保護者の方と一冊の連絡帳を通じて共有される情報が生徒理解や生徒の成長を考える上で大きな役割を果たすことを学びました。教師から保護者の方へ、今日の学校での様子や主な出来事、気になった行動に対してはどのような指導をしたのか等を明確に伝えることで、今後の課題を学校と家庭で解決することができます。また保護者の方からも不安や悩み、指導に関する要望をしっかりと聞いて対策を一緒に考えて指導することで、生徒の成長を確かなものにできるのだと感じました。私自身、一年前と比べた生徒の変化と新たな行動を嬉しく感じられ、形式的な声掛けではなく自然と褒める言葉が出てくるようになりました。特別支援学級に留まらず、すべての生徒に対して成長の喜びを保護者の方と共有しながら、学校と家庭とが連携した教育をしていきたいと思えます。

二つ目に、一学年の横浜校外学習を通して、教師間の連携の大切さを実感することができました。生徒が協力し合い行動し楽しく学べるような機会を設けるにあたって、教師は何より第一に生徒の安全を考慮し、臨機応変な対応が必要であるということです。

安全を確保することは当然のことですが、そのために色々な場面を想定することや生徒の情報を共有するなど教師間の協力がいかに重要であるかを学びました。当日は生徒と共に横浜の歴史や環境について学習することの面白さを感じながらも、常に全体の流れを把握し他の先生方と連絡を取り合いながら行動する柔軟な動きを心掛けました。この経験で、改めて「ほうれんそう（報告・連絡・相談）」の意義を感じられたように思います。これから予定されている集団宿泊的行事では、食事に際にはアレルギーを持つ生徒の対応など命を預かることに関しての配慮がより一層必要になります。教師側のチームワークの良さが生徒の安全に繋がることを学び、今後の行動に活かしていきたいと思いました。

子どもとの関わりの中に多くの楽しさや喜びがあり、改めて教師の魅力を感じています。また子どもが成長できる環境を作り出すためには学校という教育の場だけでなく、家庭・地域、教師間の連携が必要であることも新たに学ぶことができました。現場で得たこの貴重な経験を活かし、理想の教師になりたいと思います。

「生徒理解の大切さ」

外国語学部4年 安田 喜子

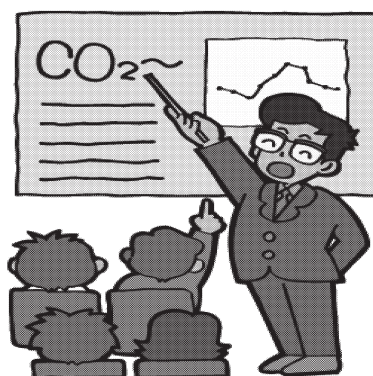
私は、昨年度後期から週に一回、栗田谷中学校にATとしてお世話になっています。一日の活動内容としては、午前と午後の授業では主に英語の授業と特別支援級での授業を見させていただき、放課後には部活動の方にも顔を出させていただいています。昨年度は特別支援級や部活動の生徒と比較的ゆっくりと関係を築いていったため、今年度からはもう少し積極的に多くの生徒と関わっていきたいです。ここでは、特別支援級で試行錯誤を繰り返しながら、日々学んでいることを書いていきたいと思っています。

最近になって特別支援級の生徒に対する理解が不十分であったことを痛感した出来事がいくつかありました。それは、数人の生徒の教室移動に付き添った時のことです。例えば、自分に置き換えてみると十分に想像がつくことなのですが、自分が中学生だった時授業中、遅刻したり保健室から帰ってきた時、クラスの視線が一点に集まる怖さから教室に入るのを躊躇してしまうことがあったと思います。この時も、授業が始まってから教室に入らなければならなかったため、ある生徒が教室に入ることができませんでした。自分に照らし合わせてみたら容易に理解できること

だったのに、その生徒にとって、教室に入ることも大きな試練であったの気づかず配慮の無い行動をとってしまいました。一步進んで二歩下がっていた彼女の「教室に入れないジレンマ」が表れていましたが、現状に対する焦燥感が先行し、生徒がなぜそのような行動をとるのか、理解ができなかったことは私の大いに反省すべき点です。

また、他にも自分の不十分な理解から生徒のことが分からなくなったことがありました。それは、線と線を順に結び、日本地図を完成させる学習の時でした。ある生徒は日本地図を黒く塗りつぶしてしまっていました。再度説明を試みても彼女はさらに黒く塗りつぶしてしまうばかりで、私にはなぜ彼女がこのようなことをするのか分かりませんでした。しかし実は彼女にとって、その課題は適当ではなかったのです。ここでも生徒の行動から推察することができず、担任の先生のお借りすることになってしまいました。これらの経験を踏まえ先生からの助言をいただき、「なぜ」と思うという生徒の行動には必ず意味があるということは、どの生徒にもいえることだということを学びました。授業中に集中していなかったり、課題をやってこなかった生徒がいた時、まず初めになぜそのような行動をとってしまうのかを考えてみることで、生徒理解が深まり、適切な指導ができるようになるのだと思います。

実際の現場では、生徒理解をもとに迅速な判断と行動が求められます。私のように教師を目指す者にとって、「現場を知る」ことで多くのことを学ぶことができます。週に一回ではありますが、毎回学ぶことがたくさんあります。次週では、ボランティアでの経験を活かして実りある実習にし、今後のボランティアでより良い支援ができるようにしたいと思っています。



「生徒と教師の関係 一人と人として」

外国語学部3年 徳永 上総

週に1度、栗田谷の坂を登る日々が始まってまだ3ヶ月程しか経っていないわけですが、講堂で座ってペンを握っているだけでは決して知り得ないこと、身に付かないことを栗田谷中学校の先生方、そして生徒たちと共に過ごすことで学んでいます。

栗田谷中で私は、普通学級と特別支援学級の両方でアシスタント・ティーチャー(AT)として生徒や授業のサポートを行なっています。当初、「中学校でボランティアをやってみよう」と思い立ったときは普通学級のみを希望したのですが、ボランティア先が栗田谷中学校へと決定し、特別支援学級にもATとして教室に入ると知ったとき、非常に悩み、不安でたまらなかったことを今でも覚えています。なぜならこれまで約20年間生きてきて、学習に問題を抱える人、生活する上で何かしらの問題を抱えるような人との接点がありません。学校生活・私生活も共に送った経験が全くと言っていいほどなかったからです。大学でも特別に特別支援教育について学んだわけでもなく、こんな私でもいきなり飛び込んでも大丈夫なのだろうかと特別支援学級のドアを開けるまでは気掛かりでした。

しかし「生徒と先生(AT)」である前に結局は「人と人」なのです。生徒たちは「大学生の先生みたいな人」といった色眼鏡で見えてくるようなことなどなく、他所者である私をすぐに素直に受け入れてくれました。確かに、感情表現が苦手な対人関係を築くことが

比較的容易ではない生徒もいますが、それはあまり問題ではありません。人と人として、目と目を合わせて、心と心を通わせた会話をすることが、時間は掛かったとしても、人間関係、信頼関係を築くための1つの手段であることは間違いないのです。人として、そして教師として当然の如く肝に銘じておかなければならないことを忘れかけていた私に、栗田谷中学校の生徒たちは気づかせてくれました。普通学級、特別支援学級を問わず、私はボランティアを始めるにあたって「自分には何ができるのか明確にし、実践する」ということを自分自身で決めました。ATだとしても教室に一步入ってしまえば、生徒に勉強を教える側に立ち、同時に生徒に対する責任も生じるのです。教室の隅で突っ立っているだけでは何の意味もありません。もちろん私はプロの教師ではなく、何の経験もないただの大学生のATですが、それならば

私なりにできることをやろうと決心したのです。

自ら率先して学習につまづいている生徒に寄り添ってみたり、授業になかなか集中できない生徒にはなるべく躊躇わずに声を掛けてみたりと小さいながらも、クラス全体を常に見渡さなければならぬ教師のサポートになればと思って実践しています。幸い、「助かりました。ありがとうございます。」と先生方におっしゃって頂けるため、「また来週もがんばろう。次はこんなことができるといいな。」と、意欲が湧いてきます。まだボランティアを始めて間もなく、躓くこと、失敗することも多々ありますが、今では週に1度のこの日が楽しみで仕方がありません。週に1度、栗田谷中学校で元気とやる気をもらっているのです。

「学校ボランティアで学んだこと」

人間科学部3年 野崎 貴裕

私は栗田谷中学校の特別支援学級と普通級のアシスタントティーチャーとして、教師の授業以外の仕事や生徒との接し方など、今まであまり意識してこなかった「学校」を学ぶことができています。朝の会議では、注意しておくべき生徒の情報の共有、その日の予定の確認、学年ごとの打ち合わせなど実際に見学し、授業以外の教師の活動を知った。生徒として教師に接していたときは、明るく楽しそうにしている姿が印象的だったが、裏側では多くの仕事に追われて大変なのにもかかわらず、それを生徒に悟られないように仕事をしてきた部分もあったことを知った。

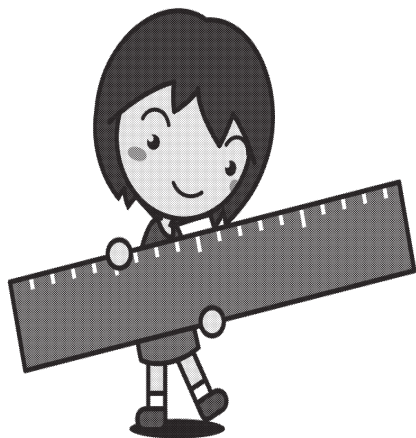
今まで生徒としての立場でしか学校に関わったことがなかったけれど、ATとして関わっていき、生徒との接し方や物事の教え方など教師の難しさを感じている。例えば、学年によって授業に対する姿勢や、話しかけた時の反応が違ってくる。1年生は、授業中の私語やノートを書かないことを注意することが多く、注意すれば素直に聞き入れてくれることが多い。2年生は、私語やノートを取らないこともあるが、他の教科の問題集をやる生徒や、髪の毛の手入れをする生徒など、授業に集中していない態度がさまざまであるように感じる。また注意して一度やめたとしても、少し経ったら同じことを繰り返す生徒や、反抗的な態度をとる生徒もいる。

このように、学年や、生徒によって態度はさまざまであり、指導の仕方もそれに対応していかなければならない。しかし、どのような指導が生徒の行動を変化させるのか、

反抗的な態度に対してどのような対応が望ましいかなど、まだ生徒と教師の関係性を理解できていないでいる。より良い指導ができるようになるには、多くの先生の対応をみる必要があると感じている。なので、これからもATとして学校に赴くときには、先生のさまざまな行動を注意深く観察し、教師というものを学んでいきたい。

私の通っていた学校にも特別支援学級はあったが、その生徒と深く関わることがなかった。また、私生活でも障がいがある人と関わることにはなかったので、今回が初めて特別支援学級の生徒と密接に関わる機会になった。特別支援学級の生徒との接し方は難しい。こちら話を聞いてもらえないこともあるし、しつこく言っても生徒が怒り出すこともあった。そうした時に、食い下らずに何度も注意すべきなのか、それともその前の指導の方法に問題があったのかなどとわからずにいる。やはり、先生とATの自分を比べると生徒は先生の言うことのほうをよく聞く。そこで、なぜこのような違いがあるのかATの活動を通じて、考察し、生徒としっかり関係を築いていきたい。

ATに行くことで、生徒の助けができていていると感じることもできているが、同時に教えることや付き合い方がうまくできていない部分もあることを実感した。どうしたらいいかわからないことも多いけれど、まだ教師のほんの一部しかみていないので、これからも参加していくことで少しでも教師の仕事について理解を深めていきたいと思う。



「特別支援学級の生徒に触れて」

人間科学部2年 矢島 芽以

私は、この4ヶ月間特別支援学級でサポートした。その中で特に学べた点が3点ある。それについて今から紹介したいと思う。

第一に、生徒がやる気をなくした場合、次にいつから作業を開始するかを明言させた上で休憩をとらせるということである。例えば、ある課題がその生徒のレベルに対して適切ではなく難しい場合や、何かしらのストレスを抱えていてそれをひきずっている場合など、生徒は課題を「やりたくない」と意思表示をする。しかし、生徒が「やりたくない」と言ったからといって、嫌がる課題をやらせ続けることや、ずっとやらせないことはいけないといわれる。このような場合、「あと〇分休憩したらこの課題をやるよ。」と誘うことが重要である。もちろん、この方法はその時々によって変わるものである。課題が難しい場合は休憩した後、多少簡単な課題を見せて取り組ませたり、課題量が多い場合は、休憩してから1つだけしたら終わりにしようと言ったりするなど、柔軟に変えていくことが重要である。

第二に、作った課題は「出来た」と感じさせるだけでなく、その課題の別の使い道を教え、達成感以上のものを感じさせるということである。これは特に授業での工作において学べた点である。以前工作においてサイコロを作ったことがある。生徒たちは完成しただけで楽しそうで、このまま家に持ち帰るものだと思っていたが、担任の先生は生徒たちを集め、サイコロでゲームをさせた。内容はサイコロを2回振って出た目が多い人が優勝という単純なものであった。しかし、生徒たちはこのゲームをするこにより、無意識のうちに足し算をしなければならぬ。足し算をさせることで、生徒一人一人の学習の程度も見られ、すばやく暗算をするということが求められるのである。このように何か作った課題を形としてだけ残して授業を終えてしまうのではなく、サイコロの数字を体験的に意識させるような使い方を教えるべきなのである。

第三に、良いことは褒め、悪いことは叱るということである。これは一般的な考え方であるが、だからこそ徹底してやらなければならないと思われる。また、特別支援学級の生徒たちは個性が人一倍強い。だから、尚更生徒にあった指導が必要だと考えられる。例えば、ある生徒が他の生徒を叩くということは、「障がいがあるから

仕方がない」といって指導を避けて良い問題ではない。もちろんボランティアの私がしてよいことは限られているが、その現場に居合わせたとき、叩いた生徒にはそれはいけないことだと諭し、当然叩かれた生徒のけがの有無を確認しフォローすることが必要であると感じた。

しかし、叱っているだけというのは、生徒との信頼関係が無くなってしまふ恐れがある。だから、褒めるときは大げさにも褒め、良いことと悪いことの分別をつけさせるべきだと思われる。

4ヶ月間補助をし、一度は校外学習の引率もした結果、2、3年生とは上手く信頼関係が築けてきたと思う。これからも、1年生とは更に会話をし交流を深め、2、3年生の技術の向上についての手伝いができたらと思う。

「ボランティアを通じての自分自身の成長」

経済学部卒業生 大西 崇文

私が栗田谷中学校にボランティアに行き始めて、4月で約1年が経ちます。特別支援級でも3年生が卒業し、1、2年生は進級し新1年生が入学してきました。さらに、大きく変わった点として、担任の先生が去年は3人いましたが今年は2人になり、先生の負担が増えたように感じます。ボランティアに行く私たちにとって去年と違い、生徒を任せてもらう場面も多くなってきました。そのような中で私が感じたことをまとめたいと思います。

特別支援級では今年から、担任が2人になったということもあり、授業中のサポートをよりしっかり行うことを意識するようになりました。国語や数学などのプリントをやっているときは問題が解き終わったら丸つけを行うこともしばしばあります。

その際、わからない所やできなかつた所があればただバツをつけるのではなく、自分で考えて答えを導くことができるように心がけています。生徒がわかるという感覚をつかむことができれば、授業自体が楽しくなり参加しやすい状況が作れると思います。同じように、授業の中で感じたことは、例えば3年生の社会の授業に行かせてもらったとき、受験を控えているということもあり、1、2年生の時の復習も行いながら授業を進めていました。また、教科書などには載ってなくても授業の項目に関連して常識として身につけて欲しい知識を教えていることや、生徒の興味を引き

やすい授業づくりは、とても参考になりました。

また、生徒と関わる部分でも気づいたことがあります。去年までは支援級に行っても生徒たちの方から積極的に話しかけてきてくれるので、休み時間では、どちらかという受身の姿勢でした。しかし、生徒と一緒に動く事も必要ですがそうではない方法で生徒の興味を引くことができることを学びました。例えば、ある日の休み時間。いつもなら、生徒たちと一緒に何かして遊ぶようにしていますが、その時は技術の時間で作っていたペーパークラフトを自分の分も貰ったので作っていました。そうすると生徒が「あ、技術のやつ作ってる！」と言って興味を持ってくれました。以前は自分から生徒に働きかけないと受け身であると考えていましたが、それだけではないということはこの体験から感じることができました。

これらの自分自身の変化について特別支援級の担任の先生からも「去年とは違ってより自然に生徒たちと接することができている」と言ってもらいました。これは、1年間ボランティアを続けてきて生徒と接してきた結果が目に見えるようになって表れたということであり、とても嬉しく思いました。しかし、教科の授業で1年生の授業に行くこともあります。普段お互いあまり顔を合わさないこともあり、自然に話すのには時間がかかりそうです。1年生でも教科によっては授業に積極的に参加していない生徒が中にはいるので、そのような子に対しては、自分から積極的に声をかけていきたいと思います。





～港中学校編～

ボランティアから見た理想の教師像

経済学部4年 土屋 萌子

私がボランティアに行かせていただいている港中学校は、中華街の入口の門のすぐ横にあり、学校に行く時には、たまに中華街からの楽しそうな音楽が聞こえてくることもある。また近くには外国人墓地などもあるので、国際色が豊かな環境に囲まれており、学校内の全校生徒の4分の1は外国につながる生徒であると聞いている。

小学校から日本に来た生徒は日本語を話せる生徒が多いが、中学校から来た生徒は全く話せない。また、日本語を話せたとしても書くことができない生徒もいて様々だ。そのため、港中学校では国際教室を設置し、そこに日本語が分からない生徒や授業についていけないところがある生徒を授業中に2～3人取り出して授業を行っている。私はそこの補助として入っている。そこで2年間お世話になっているのだが、初めは生徒とコミュニケーションをなかなか取ることができなかった。休み時間になると、外国につながる生徒が集まり、中国籍の生徒が多いため、たくさんの中国語が飛び交う。その光景に最初は驚いていたが、ボランティアをしていくうちに、生徒も私も少しずつ興味を持っていくようになった。何がきっかけなのだろうかと考えてみると3つのことが大切なのだと思う。

1つ目は、生徒の名前を覚えて名前と呼ぶことだ。それをするようになってから、生徒が私に話しかけてくれるようになった気がする。簡単なことではあるが、当たり前なことでもあるので、新しく来た生徒はすぐに名前を覚えるように心がけていきたい。

2つ目は、休み時間に生徒に混ざり会話をすることだ。生徒はいつも中国語で話しているが、話以外にも黒板に絵を書いたり、中国の将棋で遊んだり、中国のコマで遊んでいたりする。言葉を理解する

ことはすぐにはできなかったが、こうして言葉以外で何かをしている時は、私もすぐに溶け込むことができ、そこから話してくれるようになったと思う。そして次第に、中国語を生徒が教えてくれるようになり、中国語も少しだけならばわかるようになってきた。

3つ目は、わかりやすく生徒に合わせた授業をすることだ。私が生徒に数学を教えた時、生徒にわかりやすいように図を書いたり、計算を一緒にゆっくりやったりしたところ、生徒が理解することができた。そこから生徒に、「ここはどうやるの?」ともっとわからなかったところを聞いてくれるようになった。このことは、外国につながる生徒のみではなく、生徒全員と信頼関係を築いていくことに必要なことだと思う。このボランティアの経験を活かして、生徒と信頼関係を築けるように、まずは私から生徒と積極的にコミュニケーションを取っていき、生徒を深く理解することを大切にしていきたい。そして、生徒一人ひとりのことを常に考え、生徒と向き合える教師になれるようにこれからも努力していきたいと思う。



「授業中の雑談って何のため？」

工学部4年 佐久間 克紀

私は去年の4月から、横浜市立港中学校でAT（アシスタントティーチャー）のボランティアを続けています。今年は教育実習があるので、授業中は先生の様子をより一層観るようになりました。そこから学ぶことが、まだまだ多くありました。

私が、数学の授業を参観している先生は、三人います。なぜ全員同じ教科の先生なのに、私が三人とも参観しているかという、教えている教科が同じでも、全員が同じような授業をしているわけでは無いからです。教科書を主に使って、授業を進めていく先生もいれば、練習問題プリントを用意して、授業を進めていく先生もいます。違いはそれだけではありません。授業中、生徒を飽きさせないために、話をすることがあります。それは生徒との只の雑談であったり、数学という教科に関する話しであったりします。生徒の授業に対する興味の引き方も、先生によって違うのです。このように、同じ教科の授業でも先生によってやり方が違うため、学ぶことが多々あります。そして、生徒の興味を引くための話のおかげで、数学を好きになれた人もいます。

数学に関する話を聞いたおかげで、数学を好きになれたという人は、港中の国際教室にいる一般のボランティアの先生のことです。そのボランティアの先生は、数学の先生を目指している私に、数学を好きになった理由を教えてくださいました。その先生が聞いた数学に関する話というのは、なぜこの数式を勉強しているのか、という話だったそうです。その話を聞いたボランティアの先生は、数式を勉強する理由を知り、数学が好きになったと言っていました。そのボランティアの先生は、今でも数学が好きで、国際教室の生徒に数学を教えているのだそうです。そして、私に授業で教えること以外の話の必要性を、話してくれました。

私は、そのボランティアの先生のような人を増やせるのならば、授業中にする話も捨てたものではないと思えました。

これまで参観してきた先生の授業では、必ずと言っていいほど生徒と雑談をしています。それは、授業に関係のない話から、授業内容と関係している話まであります。どんな話をするのかは、その先生次第ですが、どんな内容でも最後には、生徒を授業に集中させています。こういった生徒をコントロールする術を身に付けたいと思っています。そして、そんな雑談の中で、少しでも数学を好きになる人を増やせるように、数学の知識をもっと深めていきたいと思いました。

私は、ボランティアでは主に、数学の授業を参観しています。したがって、数学の先生の雑談しか知りません。他の教科の先生も同じように、授業中に生徒と雑談をしているはずですが、その先生は、いったいどんな話をして生徒の興味を引いているのか、一度観てみたいと思います。



発行所: 神奈川大学 教職課程支援室

TEL: 045-481-5661(内線4228)

FAX: 045-413-4154

E-mail: tcr-yokohama@kanagawa-u.ac.jp

URL: http://www.kanagawa-u.ac.jp/teacher_training_course/jysp/



ボランティア通信

～白幡小学校編～

目次

～白幡小学校・AT～ 元気いっぱい5, 6組! 外国語学部4年 藤原 夏月	1
「新しい目」 人間科学部4年 久保寺 史織	2
「5・6組の子どもと関わる中で」 外国語学部3年 田端 真侑	2
「私だからこそできること」 外国語学部2年 阿部 良美	3
～白幡小学校・土曜塾～ 「学ぶこといっぱい、小学校 ボランティア」 外国語学部3年 山本 賢治	4
「子どもを注意するとは」 経済学部2年 広戸 貴哉	4
「初めてのボランティアを通して」 人間科学部2年 丸山 美貴	5
「初めてのボランティアから 学んだこと」 人間科学部2年 加藤 英美子	5
「土曜塾レポート」 科目等履修生 沖野 勇介	6

白幡小学校・AT～

元気いっぱい5, 6組!

外国語学部4年 藤原 夏月

今年も白幡小学校の個別支援級(通称5, 6組)は元気いっぱいである1年生が6人入り、他学年からも児童が加わり、児童15人、教員5人という賑やかなスタートをきった。今年でATをやらせて頂き3年目になるが、4月はとても緊張する。新しい児童たちはどんな子なんだろう、と不安と期待に胸を弾ませながら初日を迎えた。

今年の1年生は人懐っこい児童が多いなと感じた。去年は初対面で「あっち行って!」と言われただけに、初めから受け入れてもらったのはとても嬉しかった。1年生のY君は、よく「蹴っていい?」と聞いてくる。これは彼なりの構って欲しいサインなのだと、先生が教えて下さった。「蹴るのはバツです、痛いよ。」と伝えるが「痛くないよ。ほら!」と言ってちょこんと蹴ってきた。「蹴っていい?じゃなくて、くすぐっていい?って言ってごらん!」と提案してみても、彼の中にはその言葉は入っていない様子である。まだ1年生という可愛い時期ではあるが、6年生になってもこれが続いてしまと、力も強くなり、蹴られて怪我をしてしまう可能性もある。悪気があってやっているわけではないだけに、どういった声掛けが効果的なのか悩んでいた。するとある日、先生がY君に、「蹴っていい?→× お話ししよう?→○」というような紙を見せていた。障害のある子どもは聴覚よりも視覚的働きかけの方がより頭に入り易く、覚えやすいと聞いたので、この指導法はとても良いものだなと思った。

1年生の中には知的に高い児童もいれば、そうでもない児童もいる。T君はとてもお洒落でハンサムな児童である。多動傾向が強く、椅子にじっと座っていることが苦手で、プリントを片手に教室内を歩き回ることが多い。何かT君の好きなことが見つければ、

T君も立ち歩くことはなくなるのかなと思うのだが、障害を抱えている人は、自分の好きなことを見つけことが難しい場合がある。“これが楽しい、あれが面白い”といったことが分からないからだ。従って“自分で考えて何かをする”という時間はとても苦痛に感じるかもしれない。例えばそれは、私たちが何もない部屋に丸腰で放り出され、ただ時間を過ごせ、と言われるのと同じような感じなのかもしれない。そこに誰かが音楽や絵本を差し出してくれるのと同様に、教師が様々なツールを児童に差し出し、児童がその中で自分の好きなものを見つけることが出来ればと思う。長い人生の中で、何か好きなことがみつけれられるということは、とても幸せなことである。道具を使って好きなことをする、ということの中々難しい。週1回という少ない機会でも関わりの持つことはできないが、その中で少しでも彼らが興味を示しているものを見落とさない様、過ごしてきたい。

学生の身分でありながら、生の教育現場に携われる機会を与えられたことに感謝して、残りの日々を子ども達と共に笑顔で過ごしていきたい。

新しい目

人間科学部4年 久保寺史織

新しい学年がスタートし、私はアシスタントティーチャーとして白幡小学校に通うのも、2年目となりました。大学4年生になった私は、高等学校の母校での教育実習を終えて、およそ3か月ぶりに小学校へ登校しました。日にちがあいてしまったので、新年度になった学校を想像し、不安と緊張でいっぱいでした。

白楽駅からふみきりを過ぎると子どもたちの声がかんたんと大きく聞こえてきました。そこで私は、緊張していた体が少し、楽になりました。そこには、変わらない元気な子どもたちの姿があったのです。「おはようございます!」と言えば「おはようございます!」と返ってくる、そんな些細な出来事が、私にとってはとても嬉しいことでした。

そこで、今年度は4年生にお世話になることになりました。朝会が終わり、初めて教室に行きました。教室をのぞくと、昨年度は1年生だったので、これはまた、全然違った雰囲気を感じました。4年生になると、大きな机や小さな机が入り交ざり、それは私にとって新鮮で、とても懐かしい記憶のよう

でした。そんな中、子どもたちは「新しい先生だ」と、笑顔を私に向けてくれました。「先生の名前は?」と、何度も訪ねてきてくれる子もいれば、すぐ私の名前を呼んでくれる子もいて、子どもたちのおかげでまた、緊張をすっかりとほぐすことができました。

このようにして私は、1日小学校に行くだけで、何回分も何日分ものパワーをもらいます。今年度は、子どもたちの声、表情一つ一つに敏感に反応し、たくさんのことを感じ、やり取りを繰り返して成長していきたいと思っています。そして、パワーをもらうだけでなく、私からも何か伝えられることはないか考え、サポートしてパワーをあげられるようにしていきたいです。今年度も私は、子どもたちの新たな発見に出会えるように願い、白幡小学校に登校します。



5・6組の子どもと関わる中で

外国語学部3年 田端真侑

私は5月より、白幡小学校で学校ボランティアを始めました。私は通常学級のATではなく、特別支援学級の特別支援員を希望しましたが、最初はやはりどう接していいの不安になることも多く、これからどうやって意思疎通すればいいのかわからずいました。

白幡小学校では特別支援級のことを「5・6組」と呼び、現在は10人以上の子どもたちが在席していますが、一人一人違う障害があり、それぞれの子どもが必要としているサポートをするのはとても難しいことだと感じています。同じ障害の名前であっても、障害の重さやその子どもの性格によって子どもに対する接し方も変えなければいけないことを実感し、毎回のボランティアでできる限りたくさんの子どもの関わり、適切な接し方を学べたらと思っています。

私のボランティア活動の主な内容としては授業中に子どもの側について、少しでも授業についていけるよう声かけをすることや、勉強道具を用意しサポートすることです。また、授業中に立ち歩いたり、教室から飛び出してしまう子どももクラスにいるのが現状なのでその子どもを席に着かせ、授業中、先生の話に子ども達を集中させるのも私の役目

の1つです。

まだ5・6組のみんなと一緒に勉強して日は浅いですが、毎週教室に行くたびに驚かされるのは子どもたちの変化です。というのは、先週まで挨拶を全然してくれなかった子どもが自ら「先生、おはよう。」と声をかけに来てくれたときや、今まであまり笑ったり怒ったりといった感情がなかなか顔に表れなかった子どもが突然嬉しそうに私を見てくれたときなど、少しずつ私と子ども達と距離が近くなれているのを感じています。また、そのような変化があるからこそ、また来週頑張ろう、来週はどんな発見があるのかなと次回のボランティアが楽しみでなりませんし、私の原動力になっています。

これからの目標として、今まで以上に自ら考え行動し子どもに寄り添っていきたいと思っています。「寄り添う」というのは身体的に寄り添うのもそうですが、相手のことを思い、この子どもにとって自分は何ができるだろうかを見極め、言葉がけをしたり行動にうつすことも「寄り添う」ということであると考えます。私自身、言葉があまり話せない子どもと接する中で、ボランティアを始めた当初は正直「こうやってたくさん声かけしているけど、本当に意味があるのだろうか」と思ったことがあります。しかし、反応が無くても声かけを続けていると、どんどん私に近づいてきてくれるようになり向こうからの言葉は無くとも少しずつコミュニケーションがとりやすくなりました。そのため、すぐには効果が見られなくとも自分のできる精一杯のことをこれからも続けていくのはもちろんのこと、どの児童にも自分から進んで交流する機会を作り、これからも多くの貴重な経験ができたかと思っています。

私だからこそできること

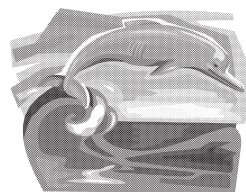
外国語学部2年 阿部良美

私は前年度から白幡小学校に土曜塾のボランティアをさせていただいていました。今年度からはそれに加え、新たにATとしても週に1度ボランティアに参加させていただくことになりました。2つの異なったボランティアに参加させていただくことで、それぞれの違いに気付くとともに、その違いからどのようなことをそれぞれの活動で大事にしていかなければならないかということにも

気付くことができました。

まず学習している児童への関わり方についてです。土曜塾では低学年クラスと高学年クラスに分かれて学習しているため、同じ教室にも他学年の子がいたり、学習している教材が違ったりという環境の中で個々に学習を行っています。だから、児童側から私に声をかけてもらい、子どもたちがわからなかった問題について一緒に考えたり、答え合わせをしたりしています。しかしATはこれとは逆で自ら声をかけて、子どもたちがどこでつまづいているのかということ把握しなければなりません。また、時間についても違いがあると感じています。土曜塾では時間は決められているものの、ある問題を何時までに解かないといけないという決まりはありません。だから、1枚のプリントをわかるまで丁寧にこなしていき、終わりの時間までに1枚しか解けない子もいれば、どんどん解いていき4、5枚終わりにできる子もいます。しかし、ATでは実際の学校生活で行われる授業でサポートをおこなっているので1コマ1コマに時間の制限があり、何時までに問題を解いて、何時からは近くの席の子と気付いたことについて話し合っ…というように1つ1つの作業に細かく時間が決められています。

このようにそれぞれの「授業」に違いがあるため、それぞれ大事にしていかなければならないことは違います。土曜塾で大事にしなければならないことは子どもたちが自分のペースを大事にして、学校の「授業」で理解しきれなかった問題を、時間をかけながらでもいいので、理解につなげていく手助けをすることだと思います。また、ATとして大事にしなければならないことは、その時間その時間でつまづいている子をすばやく見つけ、新しい学習を理解しやすくできるようにヒントを与えていくことだと思います。これらのことは両方の「授業」の雰囲気や違いを知っている私にだからこそできることなのではないかと思えます。まだ、違いと大事にしていかなければならないことに気付けたただけなので、回数を重ねるごとに、それぞれに上手く対応していけたらいいなと思っています。



～白幡小学校・土曜塾～ 学ぶこといっぱい、学校ボランティア

外国語学部3年 山本賢治

私は大学2年生の秋より白幡小学校の土曜塾のボランティアをさせていただいております。現時点では、小学校の免許を取得する予定はなく、中高の英語教員になることが第一志望ですが、小学校の現場の様子を見てみたいと思ったのと、そこから色々なことを学びたいと思ったので、小学校の方でボランティアを始めることを決めました。

しかし、私は陸上部に所属しており、部活の事情で中々ボランティアに参加できず、2年生の時は4回しかボランティアに参加することができませんでした。だから、まだまだボランティアに慣れてない部分もあり、分からないことや困ることも多々あります。

先日、5回目のボランティアに行かせていただきました。3年生になって初のボランティアです。3ヶ月ぶりのボランティアで少し緊張しましたが、子どもたちとしっかりコミュニケーションを取ることができ、「この問題わかった！先生ありがとう！」と言ってくれる子もいたので、2年生の時に比べて少し成長できたのかなと思いました。しかし、困ったこともありました。今回、私が見ていた子どもの一人が時計に関する問題を解いていたのですが、分からないから教えてほしいと尋ねてきました。その子は小学校に入学したばかりの1年生だったので、時計の読み方についてはまだ授業習っていません。私はその子に時計の読み方について教えましたが、どう頑張ってもその子は理解してくれず、「全然わかんない」と言われてしまいました。私が教えるのが下手だったということもあると思いますが、「時計が読める」など、私たちにとってはできて当たり前のことを、子どもたちに教えることは意外に難しいなということを感じました。時計の読み方ぐらい簡単に教えられるだろうと思っていましたが、そんな安易な考えではだめだと思ったし、子どもたちがしっかり理解できる教え方を考えなければならぬなと思いました。

まだボランティアに行った回数は少ないですが、中でもいろいろなことを学ばせていただきました。これからもボランティア活動を続け、そこで様々なことを学び吸収し、自分自身を成長させていきたいと思っています。

子どもを「注意」するとは

経済学部2年 広戸貴哉

私は土曜塾というボランティアに参加しています。この土曜塾とは小学校に通う子どもの学習面のサポートをするボランティアです、具体的には直接コミュニケーションをとりながら学校の授業内容を補足したり子どもたちが持ってきた宿題の分からないところを教えたり、なかには子どもたちが個人的に持ってきた問題集の解説をしたりと様々な内容です。

土曜塾は1コマ40分程度のもので、その間子どもたちはそれぞれの課題に向かっています。しかし40分間集中力を持続させるのは私たち大人でも難しいことだと思います、集中力が切れてしまうと子どもたちは近くの友達と会話を始めてしまうことがあります。しかし周りには集中して勉強をしている子もいるので、私たち指導者は「注意」をしなければなりません。

この「注意」というものを私は勉強を教えることより難しいと考えています。なぜなら私たち指導者の注意の仕方によっては子どものやる気を失わせる原因にもなりえると同時に子どものやる気を出させることも可能だと考えているからです。そして私は「注意」とは子ども達と私たち指導者との「信頼」をもとに行えると考えています。ただ「静かにしなさい」ではなく、子どもたちが今自分自身なにをしなければならぬかを自覚させることが出来るように「注意」を行うことが大切だと思いました。

この考えを私は一人の指導者として生かしていきたい、これからも子どもたちにもっと分かりやすい指導と、より丁寧に対応を行えるように努力と工夫をしていき土曜塾に参加していきたいと思っています。



初めてのボランティアを通して

人間科学部2年 丸山美貴

私は今年の5月から白幡小学校で土曜塾のボランティアとして活動させていただくことになりました。この時点ではまだ1回しか活動に参加できていないのですが、その中でも学ぶことができ、今後の課題もいくつか見つけることができました。ここでは、その日の体験や感じたことについて書こうと思います。

土曜塾には「なかよし英語」と「読み・書き・算数」があり、今回私は「読み・書き・算数」の低学年の教室で活動しました。教室に入って予想以上の児童の元気に圧倒されたのを覚えています。内容は、配布されているドリルや、学校の宿題などの各自の課題に取り組む児童の質問を受け付けたり、答え合わせを行ったりするものでしたが、説明を聞いてわかったつもりでも、実際に児童と向き合ってみると対応の仕方がわからず戸惑うこともたくさんありました。

例えば、算数のドリルに取り組んでいた1年生の児童と答え合わせをして間違っていた足し算の問題を一緒に解きなしながら説明していたのですが、なかなか納得してもらえずどう説明すればよいのか迷っていました。そこに他のボランティアの方が声をかけてくださり、一緒に両手を使って指を折りながら考えてくださいました。すると、その児童は納得し簡単に正しい答えを導くことができました。私はその様子を見て、自分の力不足を感じるとともに、もっと児童の視点から丁寧にわかりやすく教えようとするのを心掛けていかなければならないと強く感じました。

1日を通して慣れないことが多く、うまく対応できないこともありましたが、それはもちろん児童に対して言い訳になりませんので、これから活動を続けていく中で見つけた課題をひとつひとつ改善しながら、児童が充実した時間を過ごせるように努力していきたいです。



初めてのボランティアから学んだこと

人間科学部2年 加藤英美子

私は2年生の前期から白幡小学校でのボランティアに携わらせていただいています。先日初回の活動を終えましたが、それから自分の課題が多くあるということに気がきました。まず、子どもたちと打ち解けるということです。教室に入る前から子どもたちの活気が伝わってくるといった雰囲気だったのですが、いざ子どもたちと机を囲むと、その活気に圧倒されそうになりました。ドリルの内容とは関係のない質問を度々受け、うまく集中を学習へ向けさせることができなかつたように感じます。昨年以前からボランティアをされている方の様子を見ると、子どもたちと打ち解け、慕われているのが伝わってきました。私も子供たちの気持ちを上手く切り換えることができるようになりたいと思います。

次に、子どもたちに分かり易く教えるということです。ボランティアで教える立場であるので、この点に関して特に努めていかなければならないと思いました。私の説明が思ったように伝わらず、子どもたちの作業が固まったり、首をかしげるといったことがありました。このような時にも、他のボランティアの方に助けてもらっていました。子どもたちの様子だけでなく、先生方がどの様な接し方で日々現場を過ごしているのかということも知ることができる、普段大学で講義を受けるだけでは得られない貴重な経験をすることができる良い機会であると考えています。



土曜塾レポート

科目等履修生 沖野勇介

私は5月25日の土曜日に初めて土曜塾のボランティアに参加した。白幡小学校の土曜塾には2つのクラスがある。1つが「なかよし英語」で、もう1つが「読み書き算」である。私は後者の「読み書き算」クラスに参加した。「読み書き算」では「浜っ子学習ドリル」を中心に児童が宿題等の課題をこなす。対象児童は小学1年生から3年生のクラスと小学4年生から小学6年生のクラスに分かれて、3人から6人の児童と一緒に答え合わせをしたり、質問にボランティアが答えるという形式である。

そこでの児童は自分にあつた適当なレベルに応じて学習を進める。彼らが自らの課題に取り組む集中力はとても大人顔負けであり、大学生の授業態度よりも良い印象がある。確かに話す児童もいるが、いったん各自の課題に取り組むと静かになるのだから、その姿勢は素晴らしい。また明るく素直な児童が多くて私は救われた。なぜならば、私は今回の活動が初めてで不安や心配、緊張感を持っていて、児童の明るさによってそういったものを拭い去られたからである。次回の土曜塾へ参加を楽しみにしている。

土曜塾の活動で大切にしなければならないこととして、①児童の目線にたつこと、②児童の声や言葉を1つも漏らさず注意すること、③分からないことがあれば担当者に聞いて自分で判断しないこと、といったことが挙げられる。また、担当者

と保護者ボランティア、学生ボランティアの3者が協力し合って初めて土曜塾が成り立つと感じた。以上述べたことを踏まえて次回次回以降の土曜塾に臨みたい。



発行日：2013年7月1日

発行所：教職課程支援室

TEL: 045-481-5661 (内線4228)

FAX: 045-413-4154

E-mail: tcr-yokohama@kanagawa-u.ac.jp

URL: http://www.kanagawa-u.ac.jp/teacher_training_course/jysp/

発行日:2013年
7月1日

小学校グループボランティア通信

～大石台、二谷、神橋小学校～

1年生の子どもたち

法学部自治行政学科4年 吉田絵理子

目次

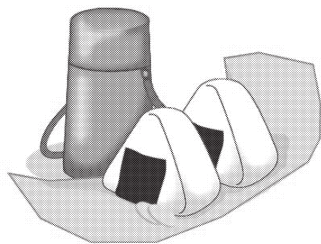
1年生の子どもたち 法学部 4年 吉田絵理子	1
ATの活動を通して 人間科学部 3年 鈴木 陸人	2
新学期を迎えて 法学部 2年 横山裕也	2
驚くことの意味と可能性 人間科学部 3年 萱森 弘貴	3
心で繋がる 人間科学部 3年 浅井千絵	4

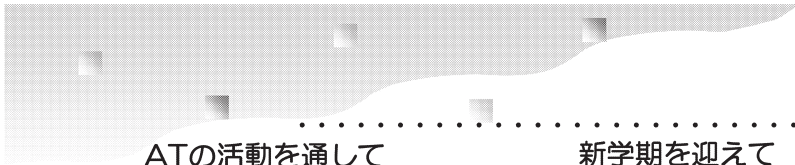
昨年度に引き続き、横浜市立大石台小学校にATとして伺っています。4月、学校が始まって2週目に今年度初めての活動を行いました。そこでは昨年度の活動に関わることが多かった、4年生の子どもたちに会うことができました。新学期を迎え学年と学級が変わったため、休み時間の過ごし方、一緒に過ごす友達など、少々様子が変わったように感じました。新入生に優しく接する姿も見られ、小学校での生活も後半に入ったことを感じました。

今年度は1年生の子どもたちと共に過ごしています。活動初日、1年生について「まだ学校生活に慣れない子が多いのかな」と想像しながら教室に行きましたが、実際には学校生活の流れを把握している子が多く見られました。担任の先生は毎朝、その日の流れを子どもと一緒に確認しているようでした。1度確認すれば分かる子と、そうでない子がいるということを踏まえると、様々なことについて一斉に確認することが大切なのだと感じました。そのほかにも1年生の教室には多くの工夫が施されていることを感じました。まず目が付いている名前のカードがそれぞれの机に貼られていること、ロッカーの中の算数セットの名前が見えるよう向きが揃えられていることなどは、1年生の活動が円滑に行われるために必要なことだと思います。子どもにとってどのようにしたら分かりやすいのか、反対にどのような点で上手いかわからないのか、といったことを考えて働きかけることが、特に低学年では大切なのだと感じました。

子どもたちは楽しみながら日々多くのことを学んでいるようで、週に1度、教室を訪れる度にその様子は変化しています。朝の歌についても「校歌」、「大石台子どもの歌」、「横浜市歌」など、次々に覚え、元気に歌う様子が見られました。体育の時間には、音楽に合わせて体を動かす、という活動がありました。友達と手をつなぎ「ひらいたひらいた」に合わせてその形を変えたり、曲の雰囲気に合わせて体を動かしたりするという活動でした。そのときの子どもたちはとても楽しそうで、生き生きとしていました。小学生の中でも特に1年生は、物事を「楽しむ」ことに長けていると感じます。休み時間の遊びのみならず、授業を受けるとき、たてわり活動のとき、先生と話すときなど、どんなことにでも楽しみながら取り組むことができていると思います。そのような子どもの特性を生かす活動が、先生の働きかけにより学校には多くあると感じています。

楽しそうな様子を見せてくれる子どもたちと過ごすことで、私自身が元気をもらっていることを感じます。小学1年生の子がどんな視点で物事を見て、どんなことを感じているのか、分からない部分は多くあります。今後の活動の中で丁寧に子どもに接し、児童理解に努めたいと考えます。





ATの活動を通して

人間科学部 3年 鈴木 陸人

新学期を迎えて

法学部 2年 横山裕也

今年度から週に一度大口台小学校にATとして通わせていただいています。子どもと接することがひさしぶりだったので、一回目の活動は自分の自己紹介も何を言ったのかわからないくらい緊張しました。また普段自分は笑顔をつくるのがあまり得意ではないので児童から警戒されていたかもしれません。自分が活動を通して意識しようと思ったことは、児童に笑顔で接することです。また自ら進んで子どもに話しかけたりしました。そうしていくうちに子どもたちの方から「先生いくつなの?」「休み時間一緒に遊ぼう」といったような言葉をかけてくれるようになりました。このように子ども達と話したりしているうちに自分は自然と笑っていることに気づきました。笑顔というものは自分で作るものではなく、自然とできるものだと感じました。

自分は今年生と一緒に過ごしています。十数年前自分も小学校一年生だったのだなあーと懐かしく感じました。教室に入ってみると、みんな元気がいいのですが、授業中に立ち歩いたり、隣の席や後ろの席の人とおしゃべりをしたりする子どももいます。その中で自分はどのように対応したらいいのかとも困るときがありました。しかし困っていても仕方ありません。この児童はどのように対応すればしっかりやってくれる、とかこの児童ならこのようにすれば大丈夫だ、など児童ひとりひとり性格が違うのでしっかりと判断しなければならぬと思います。児童を理解するためにはまずコミュニケーションをとることが一番大切なのではないのかと思います。話すことによりお互いを理解し、児童一人一人にしっかりと対応できるようにしなければなりません。

また子ども達が静かになる条件として、「環境」が関わってくると思います。担任の先生が研究授業で他の学年の教室に行った際に、自習としてビデオを子ども達に見せる機会がありました。その時の誰もしゃべらずに真剣にビデオを見る姿にとっても驚きました。普段とは違ったことをすると、子ども達は静かにしたり、逆に騒いだりしてしまったりするのだと思いました。

このATの活動を通して児童のことをしっかりと理解して、間違ってしまったことは見直し、次にどうすればいいのかしっかりと考えて、一回一回の活動を有意義なものにしていきたいと思います。

私が二谷小学校でATを始めて半年が経ちました。昨年度は、1年生、つまり現2年生を担当していました。半年間、1週間に1度でしたが一緒に学校生活を送ってきて、児童たちの授業中の態度や、あいさつなどといった、精神的な面の成長を肌で感じることができました。4月に入り、私は入学してきた新1年生を主に担当することになりました。新1年生と初対面した時に、やっと気づいたことがありました。それは、半年間一緒にいた現2年生の身体的な成長です。入学したばかりの1年生は、かつて自分が今まで担当してきた1年生とは、体の大きさが一回り小さい児童でした。今まで一緒に学校生活を送ってきたために、気づけなかった成長によりやく気づくことができました。

新一年生の学校生活の最初の2週間は、入学式や歓迎会、身体測定などと、大忙しで、本来持っているはずの元気がなく、疲れきっている様子でしたが、それ以降は、普通授業も始まり、かつての忙しさも無くなっていき、余裕が出てきた1年生に元気が戻ってきてひと安心しました。私自身も、早く1年生の顔と名前を覚えて、信頼関係を築いていこうと必死でした。ちょうど1年生みんなと打ち解けてきた頃に、彼らの元気は、授業にも影響することもありました。勝手に席をたったり、友達とお話ばかりしていたり、さらには、教室から飛び出す子もいたりしました。元気があることは良いことではあるが、授業中や全体行動をとる時にはきちんと行おう、といったけじめをつけさせることが大切だと思いました。

1年生がそういった行動をとれるよう、注意する時には、「けじめ」の言葉を教えるようにしました。実際に注意した時に、想定内ではあったが、「けじめって何一?」と聞いてくる児童が大半でした。その度に「けじめはって言葉はねー…」と教えてあげると、納得した顔を見ることができました。今年度も週1回のATで、児童達みんなの前に顔を出せず、接することが少ないが、「けじめ」の言葉は1年生の中に、少しずつではあるが浸透しているようでした。もちろん、まだ1年生ですから、授業中に怒られるような行動をとることはたくさんあります。しかし、私が注意する時に「けじめを忘れたんですかー??」と、一言かけるだけで言うことを聞いてくれることが多くなりました。児童たちが

「ごめんなさい」と納得して反省してくれることは、自分にとっては、少しだけ教員の姿に近づいた気がして嬉しいと感じることでした。

最近では運動会を間近に控えているということで、体育が多く、汗だくになりながら学校生活を送っています。かけっこや玉入れの練習したり、休み時間をはさんでダンスの練習したり、と忙しい生活ではありますが、児童たちには常に笑顔が溢れています。私も笑顔を見ながらのATはとても充実したものとなっています。1年生にとってはまだ始まったばかりの小学生生活であり、これから色々な経験を通して大きく成長していくと思います。私も今は色々な経験を通して大きく成長していくと思います。私も今はATとして成長していくためのお手伝いをこれからも継続し、近い将来、小学校教員として児童を見守ってあげたいなと思っています。

驚くことの意味と可能性

人間科学部 3年 萱森 弘貴

横浜市立二谷小学校で、ボランティア活動に参加させて頂いて、今年で3年目になります。私は、ボランティア活動という何か奉仕をしているような印象を抱いてしまうのですが、実際は「一緒に、その場所で過ごす」機会(チャンス)を与えてもらっているという感覚があります。「自分のため」にやっているという感じがしますが、誰かのためにやっているというよりも自分が勉強させて頂いているという表現がぴったりな活動内容です。

児童や学校職員の方々に対し、自分ができること(迷惑にならない範囲で)をやるということが私にとっての学校ボランティアです。その中で新しい気づきや反省を繰り返し、成長していけることを信じて活動しています。そしていつも感謝の気持ちでいっぱいです。

さて、今回のレポートでは、活動を通して私が気づいた「驚くこと」について書きます。

私が頻繁に経験する「驚くこと」は自分にとって信じてたい(受け入れがたい)出来事が起きた時に感じるものです。児童が起こす一挙一動に対して驚くこと、諸先生方の動きに対して驚くこと、二谷小学校という組織に対して驚くこと、良い意味で数多くの驚きに出会います。私は日々の活動で、この驚きに自分なりに

意味づけをしています。

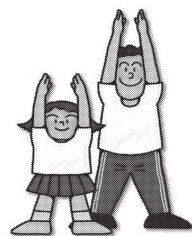
私は、こんなにも驚いているということは「自分がない(知らない・苦手な)世界」と出会い葛藤しているのだらうと考えるようになりました。21歳の私なりに教育や学校に対する考え方がありますが、そのようなちっぽけなものを「自分の知らない世界」は一蹴してくれるのです。このような経験が今の私にとって非常に大切なことなのだと感じています。

ある日の活動が終わり挨拶をしてまわった時、ひとりの先生から「落ち込んでばかりじゃダメよ!」と励まして頂いたことがありました。その日はガツンと「驚くこと」が多い日だったため、がっくりとしていたのでしょう。しかし、その「驚くこと」に落ち込んで終わりにするのではなく、うまく自分の世界と折り合いをつけようと決意しました。

もちろん、児童や周りの人たちのことが100パーセントわかる(わかり合える)ことは無理でしょう。それを求めることはおこがましいことです。しかし、完璧にはできないという現実を受け入れつつも、私は少しでもその(わかり合うこと)の割合を高めていきたいのです。私が「驚くこと」から期待する可能性は、「驚くこと」によって「自分がない世界」を「自分の世界」と混ぜていくことで「もう一つの世界」で現実を捉えなおすことです。それによって「辛い」ことに一本の線が加えられ「辛い」なことに変わると願っている行動しています。

今年1年、この「驚くこと」の意味と可能性を心に留めて他人と関わっていきます。教育の場面だけでなく、日常生活から取り組みつづける覚悟であります。

学校ボランティアの活動を通して、今後とも、「驚くこと」に色々な意味づけをしていきます。「驚くこと」に出会うためにも、あまり気負わず、周りに感謝の気持ちを忘れずに(それを行動で示すことも忘れずに)活動していきます。どうもありがとうございます。



心で繋がる

人間科学部 3年 浅井千絵

私は現在、週1回神橋小学校に伺っています。4月は、特別支援学級の子どもたちと過ごすことが多く、私が初めて特別支援学級に行った際に、「名前はないに？」とすぐに近づいてきてくれた子もいれば、「新しい人が来た」と警戒している子もいました。非常に繊細な子どもたちなので急に逃げ出してしまったり、急に大声を出したりと、最初は、どのように接していいのかわからず戸惑うことばかりでした。そんなとき先生が「子どもたちはあなたを試しているのだよ。根気よく向き合ってください。」とアドバイスをくださいました。その後、私なりに接し方を変え、言葉ばかりで伝えるのではなく、そっとそばに寄り添い、本人が納得するまでとことん一つの行動を見守ってあげるようにしました。すると、少しずつ心を開いてくれたのか、自ら私の近くに来てくれるようになったのです。特別支援学級の子どもたちは、自分の好きなことに対しては知識や記憶力が大変優れていて、私が知らないこともたくさん知っています。毎週、自分の好きなことを一生懸命話してくれるのです。最初は戸惑ってばかりだった私を子どもたちは受け入れてくれるようになりました。

5月に入ってから、3年生の教室でみんなと勉強することが苦手な子どもと一緒に過ごしています。最初は特別支援学級の子どもたちのように私のことを警戒した様子で見えていたので、何か心を開いてくれる方法はないかなと、とても悩みました。会話をしていくうちに、大好きなポケモンについて話してくれました。そこで、私は絵を描いてプレゼントしました。すると、周りにいた子どもたちまで目を輝かせ「先生、上手！」「私も描いて！」とどんどん子どもたちのほうから近くに来てくれました。子どもたちからの「ありがとう」という言葉や子どもたちが私の絵を大事そうに持っている姿を見て心が温かくなりました。私にとって絵を描くというなんでもない行為が、子どもたちの心を動かすきっかけとなったのです。私が描く絵を通して子どもたちの創造力が広がったり、心が豊かになったりするといいなと思っています。今では毎週、子どもたちは絵を楽しみにしてくれています。目を見て会話をすることも大切ですが、絵という一つのツールを通して子どもたちと心を通わせる方法もあるのだなと気づかされました。

子どもたちは素直に感情を表現し、嬉しいこと、悲しいことを全身で伝えてきます。それを全力で受け止め、導いてあげることが、教師の役目であると実感しています。ボランティアを通して、先生方から学ぶことはもちろん多いですが、一番は子どもたちから学んでいるのではないのでしょうか。子どもたちと心で繋がることはそう簡単なことではありません。しかし、ちょっとした会話や癖、表情にヒントが隠れていると思います。今後も、子どもたちと「心で繋がる」ということを私のテーマとして、学校ボランティアを続けていきたいと思っています。



発行所：神奈川大学 教職課程支援室

TEL: 045-481-5661 (内線 4228)

FAX: 045-413-4154

E-mail: educ@kanagawa-u.ac.jp

URL: <http://www.kanagawa-u.ac.jp/>

JINDAIのびのび楽習塾

よりよい学び場に

外国語学部 2年 桜井素雅

目次:

よりよい学び場に 外国語学部 2年 桜井素雅	1
のびのび楽習塾の二か月 外国語学部 2年 続橋幸治	2
のびのびとコミュニケーション 経済学部 2年 平木松治	3
自分に出来る事 経済学部 3年 臼井勇太郎	3
1/2の中で 経済学部 3年 津軽範行	4
のびのび楽習塾に関わって 外国語学部 3年 伊藤伎恵	4
支援の方向と目的 工学部 3年 勝俣恵梨奈	5
ボランティアでできること 工学部 3年 西尾真由子	6
反省した日 外国語学部 4年 小林真奈	6
子どもから学ぶこと 外国語学部 4年 佐藤陽子	7
のびのび楽習塾のボランティアを通して 外国語学部 4年 相沢勇輝	7
ボランティア活動を振り返って 法学部 4年 中島慎介	8
留学生としてのボランティア 経済学部 4年 方秋	9
ボランティアでの学びと発見 外国語学研究科 1年 鈴木恵介	9

人に何かを教えるとき、最もやってはいけないことはなんだろう。それは「嘘を教える」ことである。私は今でも、あのかのときの失敗が記憶に残っている。それは私がのびのび楽習塾でボランティアを始めてまもないころのことだった。授業の様子を見学させてもらっていると、突然先輩から教えてみないかと言われた。何の準備もしていなかったがとてあえずやってみるかと思い、中2の地理を教えることになった。

授業内容は佐賀県の特産品や有名な建造物等を覚えるということだった。佐賀県といえば、みかん、筑紫山地や有田焼。ん？「有田焼」はどんなもの？たしかに暗記項目に「有田焼」が載っていたが、恥ずかしながら私はそれがどんなものかわからなかったのだ。しかし、生徒の前でそんな恥ずかしい姿は見せられないと高まる動揺をおさえた。佐賀県の暗記テストをやることになり、彼女は「有田焼」が思い出せなかった。私は「〇〇焼」だよと言うと、彼女は「たこ焼き」や「お好み焼き」と答えた。私は思わず「惜しい。」と言ったのだ。全く違うものであるにも関わらず、「有田焼」を知らなかった自分は「嘘」を教えたと同然の言動をしてしまった。

それ以来、私は常に「教える」立場としての責任を持って、授業に臨むことを意識している。具体的には、学習相談での事前準備を大切にしている。授業では自分の得意科目ではない科目を担当することも少なくない。そういう場合特に大事になるのは、自分がその単元をしっかりと理解し教えることができる状態にあるかどうかを知ることである。実際に問題を解いてみると案外忘れていたことがあるものだ。そのことを認識しているかいないかで大きく変わってくると思う。忘れてい

たなら、復習して思い出せばよいのである。そうして、「教える」立場にいる私たちも生徒と共に成長していくのだ。

私は活動のなかで毎回とても楽しみにしていることがある。それは活動後に生徒が書く、日記発表の時間だ。特にその日自分が担当した生徒が、どんな感想をいうのか気になってしまう。もちろん、「わからなかったところがわかった」と言ってくれたらうれしいのだが、「難しくていやになった」とか「眠かった」といった感想も多くある。まだまだ自分の力不足を痛感すると同時に、次はこんなことやあんなことをしてみようと考えがうかんでくるのだ。そうして回を重ねるごとに、生徒に合った授業の進め方や説明の仕方がわかるようになってきている。

私はのびのび楽習塾でのボランティアで初めて「教える」立場を経験し、先生になるという自分の目標がはっきりとしてきた。今後ボランティアの仲間や生徒とともに高めあいながら、のびのび楽習塾が生徒にとってのよりよい学び場となるように精進したい。

のびのび楽習塾の二か月

外国語学部 2年 続橋幸治

私は大学に入って、初めてボランティアをこの春から経験しています。もともと人とのお手伝いをするのが大好きでしたので、このボランティアには以前から興味を持っていました。そこで英文学科ということもあって、国際交流にも、大変興味があったのでのびのび楽習塾に参加させていただくことを決めました。

初めて参加した時は、戸惑いや緊張もありましたが、先輩方やスタッフの方に声をかけていただき、リラックスして活動することが出来ました。その際にどう生徒と接していくのが良いのか、逆にこれはしてはいけないなどの項目を教えていただきとてもためになりました。回を重ねていくうちに、生徒を一人

で任せてもらうことや、私がメインで教える機会が増えるにつれて、自分に足りないことが二つ見えてきました。

一つ目は、私が「やるときはやろう！」「ちゃんとやるよ！」など、生徒に厳しく指摘できないことです。初めは普通の学校の様子などを聞き授業に入りますが、その気軽な姿勢を切り替えさせて、「さあ勉強、今日は～をやろう」と誘導していくことができないのです。ただならぬ生徒のペースに合わせてしまって、勉強を開始してからでも、すぐに集中を切らして、話始めさせてしまい、またその話ののってしまうというのが、いつもの自分の悪い癖として出ています。

二つ目としては、準備にあまり時間を割かないで、頭の中で簡単に計画を立てて、そのまま当日の授業を迎えてしまうことです。これは私の悪い性格の一つでもあります。私の時間割がわりときつめに入っていることもありますが、生徒は週に一度の「のびのび楽習塾」を楽しみに来ている中で、教える側の私が準備を怠って、授業をきちんと運営できていないのは、失礼なことであると思います。担当が私一人の時はまだしも、もうひと方いたならば、その方にも迷惑をかけることとなります。こののびのび楽習塾を通して、準備を怠って授業をすることは一番やってはいけないことだと、この二か月で学びました。現在は横田さんにもご協力いただき、準備をいかにきちんと行うかを第一に考え活動しています。

この二か月は私にとって大変貴重な期間となりました。のびのび楽習塾は、教育という分野において知識や経験に乏しい私が、より多くのことを実体験として学び、成長できる場なんだ！ということを強く感じました。この活動を通して生徒たちと一緒に成長できていたらうれしいと思います。



のびのびとコミュニケーション

経済学部 2年 平木松治

自分に出来る事

経済学部 3年 臼井勇太郎

のびのび楽習塾では、外国につながる子どもたちと一緒に勉強しています。のびのび楽習塾に参加し始めのころは、子どもとうまくコミュニケーションがとれないまま学習に入ってしまった。そのため、こちらから子どもに一方的に教えるようなやり方になってしまい、つまらないものになっていました。

のびのび楽習塾での振り返りの時間に言われた、授業に入る前に子どもと少し自己紹介や好きな教科などの話を含めたコミュニケーションの時間をとるようにしました。そうすることで子どものことを理解することができるし、子どももこちらのことを理解することができるので、この時間をとることによって安心して授業に入れるようになると思います。また、授業前のコミュニケーションの時間は初めて一緒に勉強する子どもの時だけではなく、できるだけ毎回会話の時間を設けるようにしています。そうすることで、信頼関係も少しずつ出てくると思います。

また、のびのび楽習塾では学校とは違って1対1で勉強するので子どもとの距離が近いです。そのため、仲が良くないとなかなか子どもが質問しづらくなってしまいます。私は子どもたちにのびのび楽習塾では楽しく勉強してほしいと考えているので、そういった意味でもコミュニケーションの時間は大切だと思います。

今年は高校受験を控えた子どもたちがいるので、受験対策ものびのび楽習塾の今後の大きな課題となってくると思います。基本的に私は中学3年生を見ているので、私の高校受験のときの話や勉強方法を教えてあげられたらいいなと思っています。

私は、のびのび楽習塾でのボランティアを1年の後期から始めました。最初のきっかけは活動内容に興味を持ったことです。もう3年生になりましたが、最初は何をしていいのか分からなかったことが昨日のように思い出されます。また、卒業した先輩からは色々なことを学びました。例えば、レクリエーションの段取り、子どもへの接し方、参加態度等、挙げればきりが無いぐらい色々な事を学びました。本当に大切な経験になりました。

今年度は、あまり参加できていないので、6月からは出来るだけ毎回参加していきたいと思います。のびのび楽習塾の後の振り返りでも子どもの事について情報共有していますが、学生間でのコミュニケーションは大切です。勉強面においては、来年受験を控えている子どもたちにとって大変重要な期間なので、私も出来る限りのことを全力でサポートしていきたいと思います。

毎回痛感するのですが、私たちが普段何気なく使う言葉でも、外国籍の子どもたちからするとどのような意味なのか分からない言葉もあるので、いかに丁寧に相手に伝えるかが大変重要だとも思います。さらに、私自身も勉強していかないといけないと思います。例えば、子どもからの質問に上手く答えられなかった時などは反省し、次はちゃんと答えられるように勉強しています。そのことが私自身の苦手分野克服にも繋がると思います。

私の大学生活もあっという間に3年目になり悔いのないように学生生活を送っていききたいと思います。子どもたちの今の時間はかけがえのないものなので、のびのび楽習塾の場所を有意義に活用してもらえる様に努力していきたいです。今まで以上にのびのび楽習塾に対して積極的に活動していきたいです。例えば、色々な子どもとコミュニケーションを行い、教材研究を今まで以上に言い、子どもたちに分かりやすく伝えるという事です。

のびのび楽習塾の中で、高校受験を迎える子どももいます。その子どもたちにとっても重要な時期なので、私は出来る限り協力していきたいと思います。例えば、受験校の過去問を研究したいと思います。

1/2の中で

経済学部 3年 津軽範行

のびのび楽習塾に参加するようになって1年が経ち、今年は昨年までとは違い、2コマある内の1コマだけ参加することになった。そのため、毎回1人だけを担当するようになっている。子どもと関わる機会が減ってしまったのは残念であるが、その分、子どもとよく会話するようになった。

子どもとの関わりについて考えると、子どもは私自身を学習中は「先生」、それ以外は「お兄さん」という2つの面で捉えていると感じる。私はこれが良いことであると考えている。それはどうなのかと思う人もいるであろう。しかし、私はボランティアとして支援する立場の上で、「先生」だけでは見ることができない子どもの一面も「お兄さん」であることで見ることができる一面もあると思う。そのように思うのは勉強の話をしていない時である。このように感じられるのも子どもが勉強とそれ以外の区別ができていないこととも関係があるだろう。

学習の内容に関して、私は子どもが「考える」ということを重視するようにしている。ただ「これが正解」と教えるとそれを覚えようとしてしまう。正解を覚えることは悪いことではない。多くの人はテストで良い点数を取りたいという気持ちが少なからずあるだろう。しかし、正解がない問題に直面した場合、覚えることに必死だった人は戸惑ってしまうだろう。確かに知識は思考の幅を広げる上では大切である。だが、自分なりに考え、自分なりの答えを持つことも大切ではないだろうか。自分なりの答えを持てるようにするためには日頃から練習する必要がある。テレ

ビでもよく耳にする言葉で「いつやるのか」という言葉がある。それに対する返答について考えると、できるうちに、学生である今がまさに当てはまるだろう。少しずつでも「考える」力をつけて物事をあらゆる角度から見ることができるようになってもらいたい。

私は、教える上で、私自身が何をしたかではなく、子どもがどう成長したかが重要であると考えている。私は脇役に過ぎない。主役をいかにして輝かせるかが脇役の仕事だ。自分ができる自分なりのやり方、また、周りの人の助言も取り入れて教えるなど、子どもの成長に少しでも貢献できるよう取り組んでいきたい。

のびのび楽習塾に関わって

外国語学部 3年 伊藤伎恵

私は今年の3月から「のびのび楽習塾」に関わり始めました。「のびのび楽習塾」を始めて3か月が経ちましたが、活動の中で、外国籍の子どもたちが日常感じる苦勞、特に、学校生活のどのようなところに困難を感じているのかを知ることができたり、教員免許の取得に向けてでは指導方法の参考になったりします。

日本人の子どもが通常であれば普通に理解できる内容がわからないことで、学校の授業にもついていけません。子どもたちが苦勞していることは学習言語と呼ばれるものです。例えば、数学の中にはよく「等しい」という言葉が出てきます。しかし、普段の会話の中では「これとこれは等しいよね」とは言いません。この違いは小さいことですが、多くの外国籍の子どもたちはこれらの学習言語を理解することを難しく感じているのです。

このような現状が、グローバル化が進行する現代では年々多くなっています。教育実習先で外国籍の生徒に出会う機会も決して珍しくないことです。こうした背景を考える上で、のびのび楽習塾に携わり、私自身も子供たちが困難に感じていることから様々な問題

点を考察するチャンスを得ることができ良かったと思っています。もし実際に現場に出たときに困難に直面している生徒がいたとき、ただ日本のやり方を押し付けるのではなく、その子の気持ちの背景を理解しながら接してあげられるようになりたいです。

学習支援ボランティアの活動では、小学校や中学校の国語、社会、理科、算数などを教えています。私は、最初はどうやって教えればよいかわからず、本当にこのような教え方で良いのか、ただ答えを与えているだけではないのだろうか、生徒は勉強を楽しんでいるだろうかという不安ばかりでした。しかし、学習相談をしてくれている横田さんや他の人たちの教え方を見ていて気づいたことは、生徒に学びの中で気づきを与えてあげることでした。私は以前、生徒に「この文章読んでどう思った？」と尋ねて「特に何も」と返答されたとき、すごく戸惑ってしまったのですが、「先生はこのように感じたけど、どのように思う？」と聞き返したりすることで、いったい生徒がどんなことを思っていたのかを引き出せることがわかりました。教える側が、これはこうで、あれはこうで、と教えるのではなく、生徒が「多分こうかな」、「やっぱりそうだ」、「やったできた」という流れで、生徒自身が考え、気づき、自信をつけて次のステップへ進めるような指導をこれから考えていきたいと思えます。

支援の方向と目的

工学部 3年 勝俣恵梨奈

「のびのび楽習塾」には、高校受験を控えた生徒が5人います。今年の「のびのび楽習塾」では、中学3年生の子ども達をサポートするためのプロジェクトを立ち上げました。

最初に始めたことは神奈川県内の受験制度について調べることです。受験制度の中には、外国につながる子ども達に関する情報や申請について、私たちの知らなかった情報が多くあり、驚きました。次に子どもたちの志望校を知ることです。高校によっては試験や面接における配点

の重みが違うことが多いからです。そして、最も力を入れている点はやはり学習面です。中学3年生のプロジェクトでは受験に向けて学習の段取りを考えました。子ども達は、学習の進度や日本語の理解度が違うので、それぞれの子どもに対応して学習を進めています。“中学1年生の範囲から復習”や“過去問を利用して試験問題に慣れる”“面接や作文のために文章を書く練習”などの受験対策を行っています。

5月20日に神奈川県担当の指導主事である宮澤先生や近隣の中学校の先生に来ていただいて研修会が行われました。学校の先生からの視点で私たち学生ボランティアに求められていることを聞きました。それは、学校からの宿題や発表の支援に重点を置いてほしいこと、日記などを書いた時にその内容について会話をし、もっと引き出しをあけてほしいということでした。宿題や発表は学校の評価の中の関心・意欲・態度に含まれるものです。外国につながる子ども達は宿題の内容や提出日などがわからなくて、提出しないことが多いという話を聞きました。宿題などの提出物も評定につながり、受験に結びついていくので、そのサポートはとても大切であると感じました。また、日記などの内容について会話するという事は、受験での面接の時に自分の考えや思っていることをしっかりと表現できるようにする練習として、とても良い方法だと思いました。

4月からプロジェクトとして受験に向けて動き出しましたが、この研修会を通して、私たちに求められていること、私たちにできることを一つの視点だけでなく、多くの視点で考える機会を得ることができました。この研修の後からは、授業が始まる前に「今週宿題ある？」など確認するようにして、あるときは宿題を優先的にやり、終わってから予定の学習に移るようしたり、日記を書いた後にその内容について会話をしたりするようにしています。このように研修で得たことを踏まえて、これからもしっかりと支援していきたいと思っています。

ボランティアでできること

工学部 3年 西尾真由子

私は2月から「のびのび楽習塾」に参加し始めました。卒業された先輩とも2回のみでしたが、一緒に活動することができました。最初の数回は、私も教えている子ども初対面で緊張してしまい、勉強の話しかまともに出来ない状態でしたが、時間が経つにつれ、学校生活のことや自分の好きな物のことなど日常の楽しい話もできるようになりました。ただ最近になって、コミュニケーションが取れてきた分、気分が態度に表れるようになってきた子や、自分の学習したくない科目をはっきりと言うようになってきた子どもでできたので、そのような時にどのように接していくのが今後の課題です。話ができるようになるまで時間のかかった子もいれば、初対面の日にも関わらず、すぐに子どもの方から話しかけてくれる子どももいました。様々な性格の子どもたちがいて楽しいです。

この数か月で、先輩が卒業され、私も含めて2月から参加し始めた人、4月からも新たな参加者が加わりました。教えている子どもたちも卒業生はいなかったものの、今年度に高校受験がある中学3年生が5人になりました。のびのび楽習塾では、4月から中3の子どもたちの受験勉強のサポートに力を入れようと考え、中3を重点的に見るメンバーを集めて週1回話し合うことになりました。私も中3の方に加わり、受験勉強の方法を考えたり、子どもたちから志望校や成績について聞いたりする機会が増えています。外国につながる子どもたちなので受験方法も様々あります。受験制度の資料も頂き、高校受験の制度についても、在県外国人等特別募集制度など一般受験以外の制度も知りました。

多くの高校や受験制度を知っていく中、受験に向けて、限られた時間の中でのびのび楽習塾での支援は何をしたらいいのかわからなくなり、研修会で神奈川県担当の指導主事である宮澤先生に来て頂きました。その結果、学校の授業のサポートが定期試験にも受験勉強にも繋がります、大切なことを知りました。他にも、1時間の授業の中でやることを子どもが見てわかる形で示す、受験勉強としては過去問を解かせるという具体的な方法も教わりました。

これからは、研修会で学んだことや資料を通して知ったことを子どもに合う形で実践していかなければなりません。週1回午前中だけの支援といっても、子どもたちはわざわざ大学まで勉

強しに来ているので、それに応えられるような支援ができ、楽しい場であるように私も努力していきたいです。



反省した日

外国語学部 4年 小林真奈

2013年に入り半年が経つが、就職活動と重なり今期はあまりのびのび楽習塾に参加することができなかった。数回の参加となったが、昨年と比べ子どもの数が少し増え、学生も増えた。今回の通信では私が先日子どもと意見文を書いた話を書こうと思う。

今まで算数や国語を中心に教えてきたのだが、初めて意見文を担当することになった。この日、私は意見文を教えることの難しさを知ることになる。その子どもは意見文を途中まで仕上げている、後半分も書けば完成だった。すぐに終わるだろうと思っていたのだが、よく考えたら意見文は教えるというよりも自分の思ったことや考えを書いていくものだと思い、子どもにどういったアドバイスをすればよいのか分からず、なかなか進まなかった。何かアドバイスをしようとしても、これを言うことにより私の主観が入ってしまい、私の意見文になってしまうのではないかと、という思いが頭の中をよぎってしまい言うことができなかった。結局私が担当した時間内で終わることができず、その日は子どもに対して本当に申し訳ないことをしてしまったと思う。

数回参加した中でこの日は一番反省した。反省する中で、私の考えではなく、子どもの考えを引き出してあげることが大事だったと感じた。この意見文で子どもは何を伝えたいのかを理解し、それをうまくまとめるためにはどう書いていったらよいのか、意見文の書き方というもの、事前に自分で予習したりすることもできたのではないかと、など多くのことを思った。事

前準備の重要性を痛感し、臨機応変にその場で対応していく力が重要だと今回あらためて実感することになった。

子どもから学ぶこと

外国語学部 4年 佐藤陽子

私がのびのび楽習塾に参加し始めた理由は、「ボランティアをしたい」ということだけでなく、教職課程と日本語教員養成課程のそれぞれで学んだことを両方生かしたいと考えたからです。参加する中で双方の分野で考えを深めることができ、充実した活動ができていると実感しています。

活動の中でまず感じるのは、こどもひとりひとりとしっかり向き合うことの重要性です。のびのび楽習塾ではたいていマンツーマンで学習するので、1時間1時間がとても濃密になります。その時間を有効に使うために、我々学生がこどもの得手不得手を把握し、何に重点を置くべきなのか考えなければなりません。彼ら自身の興味や学習意欲を尊重しながら学習することが難しい時もありますが、うまく調整し意義のある時間にしたいと思います。

また、今年度に入って、我々学生の雰囲気そのまま活動自体の雰囲気になることを意識するようになりました。それぞれ専門は異なりますが、「教師になりたい」「ボランティアをしたい」という思いのもとで活動している以上、我々が仲間として互いにコミュニケーションをとり良好な関係を築くことが、活動をより活発なものにするために重要なことだと考えます。こどもを媒介としてつながるのではなく、学生ひとりひとりがつながりをもって、全員で連携してこどもの支援をしていきたいです。

のびのび楽習塾のボランティアを通して

外国語学部 4年 相沢勇輝

外国につながる子どもへの学習支援ボランティア「のびのび楽習塾」が始まって、まもなく2年半になります。

「のびのび楽習塾」は、この場所を単なる学習塾ではなく「楽習塾」「のびのびと楽しく習える塾」という場でありたいという意志のもとで創設されました。外国につながる子どもたちは、普段日本人の子どもたちと同様に学校に通っていても、勉強が苦手、自分一人で勉強が出来ない等の悩みを抱えています。そうした悩みを私たちには、少しでも軽減し、学校生活がより良いものになってもらいたいという目標があります。子どもたちに辛い表情から元気よく明るい笑顔にしてあげたい一心です。

一年目、二年目は、支援者も頻繁に入れ替わり、私たちも模索しながらの前進でした。やはり、一から立ち上げたが故に、定石や前例と言った前提が無かったのです。日々の活動の中で、失敗した経験から、その問題を支援者同士で話し合い、どのように解決していくか、また同じ失敗をどう防ぐのか。そして、成功した経験から、子どもたちが必要としていることへの気付き、私たち自身も子どもたちから学ぶことが多いことを発見しました。子どもたちは、本来勉強がしたいのです。

私たちは子どもたちに、単に勉強を教えるのではなく、学ぶことの楽しさを教えていくべきであると感じます。よく、多くの子どもたちから「受験やテストがあるから、宿題があるから勉強しなきゃ」と言う言葉を耳にします。しかし、勉強とは自分自身の能力を高めるのであって、他人と比べたり、テストや受験で100点満点を取ることではないのです。本来テストの結果は、あくまでも評価であって目的ではないのです。つまり、100点を目的にして勉強していると、成績が全てであって、たとえ毎日コツコツ勉強していても、勉

強した日々には価値はないと見なされてしまうのです。「成功とは結果であって、決して目的ではない。」のです。

三年目の現在は、支援者が一体となって、子どもたちに勉強の「楽しさ」を伝えようという強い想いが感じられます。子どもたちも、その意志を感じ取ったように、以前と比べても自分の気持ち、伝えたいことを表現することが上手になりました。これは、子どもたちにとって、大きな成長であり、何物にも代えられない経験です。私も教えることの難しさを大いに学んでいます。しかし、教えることは楽しいです。子どもにも、もっと学びの楽しさを伝えたいです。

ボランティア活動を振り返って

法学部 4年 中島慎介

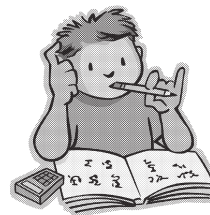
私は4月から「のびのび楽習塾」に参加し、外国につながる児童や生徒たちに国語や算数（数学）、理科、社会の学習支援を行っています。なぜ私がこのボランティア活動に参加したのかをいうと、授業についていけず学習内容を理解できない児童や生徒がいることを知り、どんな方法で学習支援をすればよいのかを考え、子どもたちにサポートしたいと思ったからです。

初めて学習支援をしたのは4月6日です。その日に私は中学2年生の生徒に社会・地理的分野の南米大陸について教えました。女子生徒は周囲のスタッフを気にしており、なかなか社会の学習が進みませんでした。私は生徒にどのタイミングで声をかけたらよいのかを戸惑ってしまい、目を反らしてしまいました。そしてお互いのコミュニケーションを取れず、信頼関係を構築するには時間がかかるのではないかと思います。

初回の反省を活かし、2週間連続して中学3年生の生徒に社会と数学を教えました。私

は簡単な自己紹介をし、生徒に学校の様子やクラスの状況などに関する質問も行いました。すると生徒から、質問に対して答えが返ってきました。私はその返答を聞いて嬉しかったです。だが社会の学習タイムで新たな問題が発生しました。私が生徒に第2次世界大戦と太平洋戦争についての歴史を一方的に教えたことで、生徒は一言も発することができませんでした。説明不足だったのか、学習方法に誤ったところがあったのか、私は不安を感じました。今まで大学で学修した講義内容を振り返ると、社会的事象への興味・関心を持たせるには、学習テーマに即した質問等を生徒に答えてもらうことです。私はそのことを思い出し、生徒が調べたり考えたりする活動が足りなかったのではないかと考えました。このことから、教材研究や学習方法を改めて考え直し、児童や生徒が中心とした学習活動を作らなければならないことを私は気づきました。

このようにボランティア活動を振り返って、児童・生徒とのコミュニケーションを取るためにはそれぞれの個性や性格を理解することだと私は思います。また児童や生徒から不明な点について聞かれた場合、具体的に分かりやすく説明しなければ、児童や生徒はさらに不安を募らせてしまうことも分かりました。今後のボランティア活動において、今までの反省と課題を活かして学習支援の能力を上げていきたいです。



留学生としてのボランティア通信

経済学部 4年 方秋

私が留学生として苦勞した経験から、外国籍の中学生への学習支援ボランティアを行っています。

私が担当している一人の中国の子は日本語がよくわからないため、学校での学習が進まなかったのが、私が一緒に授業を受けて、彼の学習をサポートをしています。

私にとって、日本の中学校の雰囲気を経験できるのはとてもありがたいことですが、実際に担当の子が学校で授業の内容を理解することができないとか、クラスメイトとうまく友人関係が築けないなどの様子を見てみると辛くなります。一方、彼は日本へ来て、学校で学んだ知識をほとんど忘れてしまって、さらに、普段は親と中国語の方言で喋るため、中国語の共通語の能力も十分ではありません。そうすると、彼らとのコミュニケーションの取り方が難しくなってしまう。とにかく担当の子の成績を上げて、自信を持たせようと思って、担当の子に練習問題をたくさんやらせたり、日本語の会話をさせたりしました。

しかし、評価テストの成績が全く上がりませんでした。自分が多くの時間を使って、子どもに学習サポートをしたのに、全然効果がなくて、がっかりしてしまいました。その時先生に、ボランティアというのは、必ずしもウインウインという関係ではないことを教わりました。確かにそうです。相手に嫌われても、相手のために捧げるのがボランティアです。ただ、一方的な情熱では逆に相手を混乱させる可能性があることに気付きました。本当に相手のためだと思うなら、まず相手の立場から物事を考えなければなりません。

そこで、私は常に彼の考えを丁寧に聞いて、励まししながら、彼に基礎知識を教えていきました。今成績面はまだクラスメイトに追いつくことができませんが、担任の先生から「担当の子は以前と比べたら、自信が持てる

ようになって、勉強する姿も真面目になって来た。」とお話を伺うことができて、非常に苦勞した甲斐があると感じました。

これからも、担当の子と共に成長していきたいと思います。

ボランティアでの学びと発見

外国語学研究所 1年 鈴木恵介

私は今年の4月からのびのび楽習塾に参加しています。去年から教職課程を履修していて、実際に子どもたちに勉強を教える活動がしたいと思ったのが、ボランティアを始めるきっかけでした。

活動を始めてまず感じたのは、子どもたちに勉強を教えることの難しさです。自分ではわかっている内容でも、それを人に教えるとなるとなかなか難しい。どのように説明したらうまく伝わるのだろうか、毎回とても頭を使っています。また、のびのび楽習塾に来ているのは外国語を母語とする子どもたちなので、日本語についての質問をされることもあります。たとえば、「ものの見方」という言葉がありますが、ここでの「もの」はなぜ漢字の「物」ではないのか、といった質問をされた時はすぐに答えることができず、日本語を教えることを難しく感じると同時に、自分が普段何の気なしに使っている日本語の不思議な部分や面白さを感じました。



のびのび楽習塾に来ている子どもたちは英語や中国語を母語としています。のびのび楽習塾に参加した時から知っていたことで、実際に学習支援をしていく中で、そのことをより考えるようになりました。もし自分がそのような状況になったらどうだろう？外国に住むことになり、日本語が通じない学校に通うことになったとしたら。うまく想像することはできませんが、そこにはやはり多くの壁があると思います。語学の授業だけでなく、すべての授業が外国語で行われます。また、文化の違いに戸惑うこともあると思います。友達をつくることも簡単ではないかもしれない。考えただけでも、それらの壁を乗り越えるのはとても難しいことだと思います。まして、のびのび楽習塾に来ている子どもたちは小学生や中学生です。自分の半分くらいの年齢の子どもたちが、異なる言語、異なる文化の国で生活しているということを考えると、彼らがとてもたくましく思えます。

のびのび楽習塾に参加してから2か月が経ちました。子どもに勉強を教えたことがなかったので、最初は慣れることでいっぱいでしたが、だんだんと、子どもたちにわかってもらうにはどのようにしたら良いか、考えられるようになってきました。しかし、学ばなければならないことは、まだまだたくさんあります。これからも、のびのび楽習塾での活動を通して、多くのことを学び、そして、外国につながる子どもたちのために、少しでも力になりたいと思います。



発行日：2013年7月1日

発行所：神奈川大学 教職課程支援室

TEL：045-481-5661（内線4228）